



506

224

भजातशत्रुराजः



始



506-224



阿
闍
世
王

藤

秀

璋

著



この戯曲を亡祖母上温雅院菊子刀自の靈にさしぐ

表紙に題せられたる梵語「阿闍世王」の文字は
恩師文學博士高楠順次郎先生がこの貧しき戯
曲を莊嚴してくださる爲に特に筆を執つて下
されたものであります。こゝに明記して甚深
の感謝の意をさしげます。

序

——「阿闍世王」と自分——

阿闍世王といふ名が始めて自分の心に或る感銘を與へたのはもう彼れ是れ三十年も前のことである。當時漸く小學校にはいつたばかりの自分は毎日學校から歸ると田舎の寺院の書院の經机の前に坐らされて父から口寫しにお經を教へられてゐた。丁度『阿彌陀經』がすんで「觀無量壽經」にかゝらうとする時に自分は驚くべき物語を聞かされた。それは印度の王舍城の阿闍世太子が惡友提婆達多の教唆によつて父君の頻婆娑羅王を虐殺し母后の章提希夫人を深宮に幽閉した。そしてこの慘劇が機縁となつて章提希夫人は厭離穢土の心を起して釋迦如來の説法を請ひ、茲に淨土教の端緒が開かれたといふのである。自分はこのストライキングな『觀經』成立の説話が氣に入らなかつた。お經と言へば非常に人間離れのした神々しいものゝやうに信じ切つてゐる少年の自分は此「親殺し」の話を書いた『觀經』に對して一種の反感と義憤とを禁することが出来なかつた。さうしてこんな淺猿しいお經は習はないと言つて父を困らせたことを記憶してゐる。

それにも拘らず自分の子供心は不思議にもこの「血腥いお經」に強く引かれて行つた。自分は

「爾時王舍大城。有一太子。名阿闍世。隨順調達。惡友之教。收執父王。頻婆娑羅。幽閉置於七重室內。制諸群臣。一不得往。……」と文字を辿りつゝ不思議な心の戦きを感じずにはをられなかつた。子供の自分には分りかねる高さあるものがこのお経の中に秘められてゐるやうに思はれ出した。さうして文字と文字とが鈴玉のやうに輝々として鳴り渡るやうなりズムによつて連つてゐるこのお経を一生懸命に習つて行つた。けれどもかういふ淡い感激は年と俱に次第に自分の意識の水平面下に深く没し去つてしまつた。そして其後十四五年を経て大學で印度哲學の講義などを聴く頃になつて阿闍世王は新しい色彩を以て再び自分の意識の表面に浮び上つて來た。當時傳統的なナイーヴな信仰が破壊されて何物かを覓めて喘いでゐた自分には、この王舍城の悲劇の渦巻の中軸をなしてゐる阿闍世王の暴虐な血腥い魂の藻掻きが最もびつたりするやうに思はれた。新しい時代の洗禮を受けた若い人々に最も同感せられ、同悲せられ、其深の興會を強むるものは此劇詩中の數々の人物の中で矢張り阿闍世王でなければならぬと思はれた。次に阿闍世に父王の逆害をすゝめ自らは釋尊に叛逆の毒双を翳した提婆達多が、丁度イスカリオテのユダが基督傳中に特異な地位を以て人々に臨んでゐるやうに人々の注目を惹かねばならぬと思はれた。この二つの燃へる魂が忽ちにして固く結ばれ、又忽ちにして再び左右に別れねばならぬ運命に迫られてゐた事實は當時の若い自分に色々なことを思はせずにはをかなかつた。自分が何等かの形でこの二人を書いて見たいと思ひ立つたのは

その頃であつた。

『阿闍世王』が戯曲の形を要求してゐることが自分にはつきりと意識せられたのは五年餘り前のことである。自分はこの新しい意圖の下に改めて阿闍世に関する素材を捜し出した。自分は『觀經』『涅槃經』『法華經』『未生冤經』その他の阿含部及び律部の諸經典、『法華問答』、ビガンデー僧正の『緬甸佛傳』、オルデンベルヒ氏の『佛陀』、リス・デギツズ氏の『佛教』、それから近頃になつて立花俊道氏によつてパーリー原典より直接に國譯された『大品』、『小品』、さういふものを涉獵しつゝ、靜かに心内の醗酵を待つてゐた。けれども戯曲の主人公として最も肝腎な阿闍世の性格ははつきりと掴むことは出来なかつた。さういふ點について最も精細を極めてをる『涅槃經』に於てすら「其性慳惡にして喜んで殺戮を行じ口の四過を具す。貪恚、愚癡、其心熾盛なり」といふ調子に至極無難作に描かれてゐるのみであつた。自分はこの上は靜かに經典（主として『涅槃經』の「梵行品」及び「迦葉品」である）の文字をちつと見詰め、その底流の響きに耳を傾ける外に仕方がないと思つた。さうして此經典の筆者が阿闍世王の轉機を描破して鮮かな印象を讀者に與へやうといふ明かな意圖を以てこの王の性格を極めて臆惡なものにしたに拘らず、自分はこの若き王は美しい至純な魂の持主でなければならぬといふ結論に到達した。それには種々の理由もあるが主として轉機の前後に於ける王と耆婆大臣との對話によつて見込をつけたのである。殊に昨年夏に至つて高楠博士

より知らせて頂いた雨行大臣が釋尊の死を報じた時の阿闍世王の悶絶せる光景を描いた『毘奈耶雜事』第三十八の記事の如きは、王の釋尊に對する思慕景仰の如何に深かつたかを語ると言ふよりも、寧ろより多くこの王の純淨な心情を雄辯に語つてゐると信じさせられる理由が十分にある。自分は自分の所信に裏書せられたやうで深い愉悅と感謝とを禁ずることが出来なかつた。

提婆達多の性格に至つては自分の知る範圍内ではどの記實を見ても瘳猛な奸佞な野心家として描かれてあるばかりであつた。比較的精しく提婆達多を描いてあると思はれる『小品』の破和合篇の記載にしてからが、提婆達多の心意に對してどれだけの同情を持つてゐるやうにも思はれない。それもその筈である。提婆達多、關する記述は悉く釋尊の讚仰者の手に成つたものであつて提婆の系統の人によつて書かれたものが無いのだから。よしんばあつたにしても湮滅して傳はらないのだから。思ふに此等の經典の成立せる時代には提婆達多を極惡人として記載することが佛教の正統を顯彰する所以であつたであらう。(之は單に提婆達多のみならず、所謂六師外道その他凡百の外道と稱せられてゐるものに對しても同様である。)けれども自分は提婆達多やその他の所謂外道者にそれぞれ正當な理解と同情とを與へることが、群衆の上に壯嚴にそゝり立つ雪山を仰ぐやうに、一層釋尊の偉大と光耀とをはつきりさせる所以であると信ぜしめられてゐる。

釋尊及びその弟子達に對しては自分は經典の記述を素直に受け取りたいと思つた。それはこの戲

曲が要求してゐるものは釋尊の圓滿無礙なる大人格の力、民衆の心の中に二千五百年後の今日からは殆ど想像もつかぬ程に深く浸透してゐた釋尊の魂の力であるからである。鳥渡その顔容を仰ぎ見ただけで不可抗的に釋尊に惹かれ、吸はれるやうに釋尊に没入して往く人々の魂の動向である。自分は思ふ。近代人は古來の宗教的偉人格を自分と同じい水準にまで容赦なく引きおろすことに成功した。さうして人間の魂が彼れの高き信念と不斷の精進とによつて何處までも天的に高揚し得る可能性を有つてゐることを見忘れてしまつたのではあるまいかと。兎に角自分はこの戯曲に於て二千五百年前の印度の民衆の中に巍々として聳え立つてゐた釋尊の大きな魂を、釋尊の周圍をとり巻いて釋尊を莊嚴してゐる人々によつて彷彿せしめたいと思つた。民衆の景仰的になつてゐる釋尊を描くことが阿闍世王の魂をゆり動かす動因を示唆することを信ずるからである。

或る人々は自分が親鸞教徒の一人である故を以て此戯曲は一種の信仰宣傳の底意を以て書かれたものではないかと言ふかも知れない。それに對しては自分は躊躇なくきつぱりと否と答へる。有體に言へば自分は寧ろさういふ心持が自分の創作欲の中へ忍び込むことを可なり神經質に恐れてゐた。何故なら自分は何物にも囚はれずに純粹に藝術品を作り上げた念願に燃えてゐたのだから。さういふ成心をさしはさんで筆を執るといふことは藝術のいのちを損なふ所以であると信じてゐるから。また或る人々はこの戯曲の中に起伏してゐる諸種の事件の年次及び種々の人物の年齢の相違や、

恐らくはまた少々の場所錯誤を見出して批議さるゝかも知れない。事實、故意に露骨に形の上に於て經典その他の記述と相違してゐる所があるが、それは歴史上の考證でもなく傳記でもなく純粹に藝術として取扱はれたものに當然宥されねばならぬことと思ふ。藝術家は彼れの目前に現はれ来る諸種の素材があるが儘に積み重ね組み合はす工匠ではなく、素材を自在に驅使して素材に生きた魂を刻み込む彫刻家でなければならぬからである。たゞ鳥渡こゝに言ひ添えて置きたいのはこの作中の隨所に現はれてゐる經典又は聖教の文字は原意を冒瀆せざる範圍内にて極めて自由な使ひ方をしてあることである。だが、それは決して出鱈目に使つたのではなくして幾番の思考の上にその場合その場合にびつたりする文字を使つた積りである。

自分は大正八年の二月の中旬に此戯曲を書き始めた。さうして大正十一年の二月の下旬に完成するまでに全體に亘つて三度稿を改めた。劇しい日々、責務や羸弱な健康と戦ひつゝ、かういふ方面にはまるで素人の自分が兎に角全三ヶ年の間辛抱強く題材と組打ちして漸くこゝまで漕ぎつけたのである。自分は由來外國には種々の宗教的人格を取扱つた優れた作が色々あるにも拘らず、浩瀚なる佛典の中より大なる感傷の止れて來ないのを憾みとしてゐた。自分はこの作が一の良き機縁となつて更に荒蕪たる佛典の處女地の中へ勇敢に鋏を打ち込んで行く若き眞剣な藝術家の出現し來ることを待ち望む。それに對する一の尊い捨石として、よしこの作が時代の底に沈んで行つても忍んで悔みを

ないだけの心の裕さを持つてゐる。

自分は今沁々と阿闍世王をはじめこの劇中に現はれてゐるすべての人物に合掌したい氣持に迫られて來た。自分は今親鸞聖人がその著『教行信證』の中に永々と『涅槃經』に現はれたる阿闍世王の記實を引用せられたことや、同書の總序の文中にこの劇詩中の凡ての人物を「權化の仁」といふ言葉を以て禮讃してをられる心持に本當に觸れることが出来るやうな氣がする。自分は今堪え難い永い忍苦と精進との後に惠まるゝ度ましい悦豫を以てこの淨土教發祥の母胎たる王舍城の劇詩をなるべく多くの同朋に讀んで頂きたいと希念する。詩は史よりも眞實なりといふ藝術上の標語がどれだけこの戯曲に於て義とせらるゝか、それは心ある人々は必ず見て下さるであらうと信ずる。

一九二二年三月

藤 秀 翠

岡 落 葉 氏 裝 幀

阿 闍 世 王

諸佛如來是法界身入一切衆生心想中

『觀無量壽經』

人物

阿闍世太子
 頻婆娑羅王
 韋提希夫人
 婆滋羅
 優陀耶
 耆婆
 月光
 雨行
 吉祥
 月稱

後に大王。
 太子の父。
 太子の母。
 太子の妃。
 太子の息。
 太子の従兄。大醫。大臣。
 大臣。
 大臣。
 大臣。
 大臣。

釋迦牟尼世尊
 目連
 阿難
 舍利弗
 富樓那
 提婆達多
 瞿伽離
 迦留羅
 乾陀
 三閻達多
 須那利多
 蓮華色

釋尊の弟子。
 釋尊の弟子。
 釋尊の弟子。
 釋尊の弟子。(登場せず)
 釋尊の弟子。(登場せず)
 提婆の弟子。
 提婆の弟子。
 提婆の弟子。
 提婆の弟子。
 提婆の弟子。
 比丘尼。



序
幕

婆羅跋提

瑠璃光

舍脂

耆婆の生母、巡禮、後に比丘尼。

宮廷詩人。

侍女。

その他侍醫、侍臣、武將、守門者、市民等。

場
所

中印度摩竭陀國王舍城及び伽耶丘上の提婆達多の僧園。

時
代

釋尊の晩年。

王舎城内阿闍世太子の宮殿の一室。

正面向つて左の隅に近く壁を窪ませたる所に祭壇があり、因陀羅神の大きな彫像が壯嚴に立つてゐる。紺玉虫色の古雅な感じのする帷がずつしりと垂れて其左の半身を覆ひかくしてゐる。正面中程より右の端近くまでかちりと明け放ちたる戸の外には廊を越えて遙かに廣庭の樹林が見え、その右の隅に他の宮殿の堦の尖端と階段とが僅かに覗いてゐる。

舞臺右側上手寄に他の室に通ずる廣い口があり、栗皮茶色の重々しい帷が一面にかゝつてゐる。その下手に壁に添ふて莊麗なる座榻が置かれてある。左側下手寄に扉がある。

室の中央やゝ左によりて圓卓があり、金絲を以て刺繡せる華麗なる卓氈をかけてある。卓上の花瓶には紅紫様々の花が盛られ、もう少しで出来上らうとしてゐる。卓の右側に一脚の安樂椅子がある。

暮春の薄く曇つた午後半ば過ぎ。

一人の侍臣（二十八九歳）卓上の花瓶に花を挿してゐる。

侍臣。（一莖の紅の花を卓の傍の花籠より抜き出して花瓶に挿さうとして）かうつと……こいつをも
う一本こゝらに挿すといふのだがな。（挿す。）どうもうまく行かないな。（抜く。挿し直
す。二三度やつて見て）どうやつて見ても面白くないな。（抜き出してちつと眺めて）それに又
この落叉草の花は自暴に赤い色をしてやがるな。まるで血のやうだ。——さうだ、
丁度何時ぞやの獵競の時に太子様の征矢に射止められたあの大きな羚羊の側腹から
どくどくと流れ出た綿血のやうな色をしてゐる。ふむ、こちらのこのすつきりとし
た文邪草の花や可愛らしい蓮草の花に比べて何といふ毒々しい色だらう。（考へて）
その癖この氣味の悪い程眞赤な花がいちばん太子様の御好きさな花と來てゐるのだ
からな。（花を挿す。）

廊の方に人の氣勢がする。侍臣ぎよつとしてその方を見る。

阿闍世獵衣を着、腰に短劍を下げ左手に弓を持ち、廊より登場する。二十一二歳、精悍にして威嚴のある容
貌と健かな體格とを持つ。眉目の間に暗い憂悶の影が刻まれ、年齢よりも少し老けて見える。

侍臣。（翹々として恭しく迎える。）お歸りなされませ。

阿闍世。(黙つてちつと侍臣を見詰める。)

侍臣。(辯解するやうに手を揉みながら) 太子様の御好きな草花を盛つてをりましてございませう。はい。丁度只今すみました所でございませう。

阿闍世。ふむ。(弓を差し出す。)

侍臣。(憤んで弓を受けとり左下手に退き立つ。)

阿闍世。(大跨に歩んで安樂椅子の前に立ち、曇時ちつと花を眺めて) 綺麗ぢやな。逝く春の名残を惜しむやうに色とりどりに見事に咲いてゐるわ。

侍臣。お氣に召しますれば此上もなき仕合せに存じます。

阿闍世。(尙ちつと花を見詰めたまゝ、獨白のやうに) あゝ、この強烈な匂ひはどうだ！ わしの

疲れた心に沁み渡るやうぢや——(安樂椅子に腰を下ろす。)

侍臣。さぞお疲れ遊ばされたこととございませう。(阿闍世の黙つてゐるのを見て) したが、畏れながら今日はいつともよりも御歸邸の時刻が大分お早いやうに存じまするが……。

阿闍世。(不興氣に) うむ。あの爵者として榕の樹の繁つてゐる小暗い谷合ひの所で、危く一人の婆羅門の修行者を射殺さうとしたのぢや。その時わしは急に歸りたくなつて家來の者共を捨て、置いて歸つて來たのだ。

侍臣。まあ、それは、それは大變でございました。

阿闍世。(曇時不快な顔想に沈んで沈黙する。突然侍臣に向ひ) よい。行け——

侍臣。それでは御悠くりと御休息遊ばしませうやうに。(恭しく一禮して扉の方に退場せんとする。)

阿闍世。(何か考へてゐるが、呼びとめる。) 待て。待て。

侍臣。(立ち留つて) 何ぞ御用でございませうか。

阿闍世。わしの不在中に伽耶の僧園から誰れか使の者が來なかつたか。

侍臣。あの提婆尊者の方からでございますか。いゝえ、どなたもお見えではございませんでした。

阿闍世。ふむ。(考へて) 大王の御所の方へは?

侍臣。(鳥渡當惑したやうに口を噤んだが) 大王様の御殿の方へは釋迦如來様のお弟子が一人
參内せられた様子でございます。

阿闍世。(突然不快氣に眉を擡める。) 釋迦の弟子? 誰れだ。

侍臣。(阿闍世の眼色を窺ふて) 目連尊者のやうに見受けましてございます。

阿闍世。(愈々不快氣に) 何、目連が? (獨白のやうに) ふむ。また父上に例のお説法をし
に來たのだらう。(侍臣に向ひ) して、もう歸つたかな、目連は。

侍臣。さあ、如何でございますか。その所はよくは……。

阿闍世。(遮るやうに頷いて) よし。——去れ!

侍臣。はつ。(鄭重に一禮して扉より退場する。)

阿闍世。(姑くちつと空を見詰める。翹て吐き出すやうに) 目連——厭やな奴だ。氣味の惡るい
奴だ。(短き間。頭を振つて) だが、あれは一體何だつてあの男のことを氣にするのなら

う。あいつがあゝの魅するやうな眼の力と爽かなお説法とを以て父上の心の底へまで
も喰ひ込んでゐるからか。あいつが父上の耳に吹き込む老獪な叫びがあれに纏つて
ゐる無数の運命の絲の一筋でも纏れさせることが出来る、といふのか。ふん——

(急に立ち上りて花瓶より一莖の落又草の花を抜き出し、眼の高さに揚げてちつと見詰める。) あゝ何とい
ふ色だ! 眞紅しんくに燃えてゐるこの色はどうだ! この天地あめつちも焼き盡さうとばかりに
輝いた色は! (花莖に接吻する。)

左の扉を開いて侍臣恐るゝ登場。一禮する。

阿闍世。(尤めるやうに) 何だ。(腰を下ろす。)

侍臣。(おづくして) はい。あの、雨行大臣あめようが拜謁を乞はれるのでございますが……。

阿闍世。(眉を擡める。間。考へ直したやうに) 通せ。

侍臣。畏りましてございます。(一禮して退場。)

間もなく雨行、侍臣に導かれて登場。六十歳あまりの實直な風手。その廣い額に憂慮の色が濃く漂ふてゐる。

侍臣直ちに退場する。

雨行。(鄭重に一禮して) お疲れの所へ推参いたしまして洵に恐縮に存じます。

阿闍世。兩行か。何ぞ用事かな。

雨行。(静かに) 少々申し上げねばならぬ義がございまして……。

阿闍世。(雨行の言葉を奪ふやうに少しせき込んで) 何事かな。

雨行。(一層静かに、しかし力を籠めた調子にて) 餘計なことは一切抜きまして直截に申し上げます。(短き間を置いて) 實は此頃太子様には日々御遊獵にお出まし遊ばされるといふお噂が大王のお耳に入りまして、大王には一方ならず叡慮を惱ましてゐらせられるのでございます。申し上げるまでもなく、大王には最早御齡おんよばも傾いてゐらせられることでもあり、尙又昨今は餘り御健康もお勝れ遊ばされぬ方でもございますし、旁々以て杖とも柱とも頼み遊ばされる太子様の尊い御身に萬一不慮の禍ひでもありましてはと、そのみ日夜にお案じ遊ばされるのでございます。畏

れながら、命を知るものは巖牆の下に立たずと申す古人の金言もございすれば、太子様には今少しく御自重遊ばされますやうに内々お願ひ申す爲に参上いたした次第でございます。

阿闍世。(冷やかに) ふむ。……それではわしに獵りをやめよと父上は言はれるのだな。

雨行。いや、強ちに全然停止せよと仰せられる譯ではございませぬ。たゞそこに或る善き節度をお保ち下されますならば如何程にか大王の大御心がお安まり遊ばされるか知れませぬ。(短き間) それに、此頃のやうに日々御遊獵にお耽り遊ばされるやうでは第一人民が難義をいたします。それ故に……。

阿闍世。(違つて不興氣に) そんなに人民に氣を兼ねばならぬかな。あの蒙昧な昔陀しゆだや栴陀羅せんだらのやうな賤民共を憚らねばならぬかな。

雨行。(ちつと悲しく阿闍世を見詰めて) 畏れながらわたくしは、この譽れある摩竭陀まがたの大王國をやがてお繼ぎ遊ばさるべき太子様の御口から左様な御言葉を承らねばならぬこ

とを洵に悲しく思ひます。〔嘆息して〕あゝ今更申すも恐れ多いことではございますが、御父君頻婆娑羅王様には始め微弱な御身分からお起り遊ばされて遂に摩竭陀、鴛伽の兩國の御主君とならせられ、この廣い五天竺の中にも儔ふものなき國運隆盛の礎をお固め遊ばされたのでございます。あゝ、わたくしは創業時代の大王の御苦心と御精勵とを想ひますと、今でも涙の滲むのを覚えるのでございます。しかるに……。

阿闍世。(漣つて淋しく笑ふ。)はゝ、雨行。わしは創業時代のそち等の苦心談を何遍聞かされたらいゝのだ。(調子を強めて)だがな、雨行！ そちが若しはつきりと眼を開いて列國の間に於ける今日の我國の地位を見るならば、そちがしつこく繰り返してわしに聽かして來たその創業時代の苦心談をもうやめてもいゝ時だといふことを知らねばならぬ筈ぢや。なぜと言つて摩竭陀の王國が今日威を四隣に振ふてゐるのはそちが頻りに口にするその「創業」の爲でもなく又姑息な「守成」の爲でもないから

ぢや。太子阿闍世の存在がこの摩竭陀の王國を九鼎大呂よりも重からしめてをるのぢや。

雨行。(默然として阿闍世を見詰める。)

阿闍世。雨行！ わしは齡甫めて十六にしてあの豪勇無比の名を轟かしてゐた迦尸の波斯匿王と戦つたのだぞ。わしは三十萬の兵を指揮して迦尸の八十萬の大軍を打破つたのだ。二十萬人を殺して十萬人を虜にした。さすがの波斯匿王も到頭わしの前には膝を屈せぬ譯にはいかなかつた。彼れは遂に自らの眼のやうに愛してゐた王女婆娑羅をわしの妃に容れて和を乞はねばならなかつた。それ以來列國は摩竭陀の名の下に潛伏し、永くこの美しい豊饒な國土を覬覦する望みを絶つたのぢや。

雨行。(何か言ひかけてやめる。間。靜かに)いや、摩竭陀の國が今日あるを得るのは偏に太子様の御功績に依りますことは三歳の童子と雖もよく存じて居ります。太子様の御名は遠く粟散邊土の果てまでも太陽の如くに輝き渡つてをります。(短き間。)

なれども、畏れながら威を四隣に振ふといふこと、信を國內に布くといふこと、は
おのづから違ふた振り合ひがあらうかと存ぜられます。固よりこの由緒たゞしき
神聖な國土を完全に外敵から護る爲には劍の力に依らねばなりません、眞に須彌
山の如くにゆるぎなき國家萬年の基礎を固めるには徳の力に待たねばならぬと信じ
ます。何故と申して民の悩みを憂ふることの出来ぬ王朝の榮えたためしは古來い
まだ嘗てございませんから。畏れながら大王が日夜に大御心を痛め遊ばされるの
はこの點でございます。故なくして無告の民を苦めるといふことはこれ取りも直
さず……。

阿闍世。(我儘し切れなくなつて遮る。) 無告の民を苦しめる? わしの獵りに出掛けること
がな? ふひ—— (俄に氣色ばんだ調子になつて) だが、さういふことを言はれる父上だ
つて今でこそ聖徳並びなき大王と仰がれておさまつてをられるもの、お若い時分
には随分と獵りが御好きだつたのだらう。たまには「無告の民」を苦めなされたこ

ともおありだらう。間違つて森の中の苦行者の一人や二人は射殺されたこともある
だらう。(雨行突然ぎよつとして顔色を變へる。) 丁度わしが先刻も少しのことで婆羅門の
行者を一人危く射殺さうとしたやうにな。

雨行。(眞者になり幽かに唇を震はしつゝ阿闍世の眼を凝視する。)

阿闍世。(快調に笑ふ。) はははは、どうしたのぢや雨行。そんなにわしの言ふこ
とに吃驚しなくてもいぢやないか。これは冗談さ。わしの想像を言つただけだ。

(次第に陰鬱な調子になる。) だがね雨行、こゝだよ、わしの言はうとするのは。つまり父
上がわしの遊獵を彼れ是れ言はれるのは國家だとか人民だとかいふやうな公の事に
關してではないのだ。原因は他にあるのだ。一言にして云へば釋迦の教へに酔ふて
をられるからだ。あの小才子の目連や富樓那などの生温かいお説法に迷ふてを
られるからだ。目連は今日も父上の所へ來たさうだな。

雨行。(躊躇ひつゝ) お見えになりました。

阿闍世。(追ひかけるやうに) その目連がさかしらにわしの遊獵を停止せよと父上に申し上げたのであらうがな。それで俄に父上がそちをわしの所へよこされたのであらうがな。

雨行。(きつぱりと) いや左様ではございませぬ。如何に目連尊者がこの王舎城の王室の血を引いてをられやうとも、尙また「殺生」が五戒の隨一に戒められてある恐しい惡業であるにしても、あの方が左様な潜越なことを大王に申し上げられる筈がございませぬ。

阿闍世。ふむ。……その五戒の説法を目連が今朝から父上のお耳に吹き込んでわたのだね。

雨行。さ、さようございませぬ。

阿闍世。(疾風の襲ふやうに) その目連が鳥や獸の肉を食ふではないか!

雨行。(たちろぎつと) そ、それは、供養せられた時は食べられます。

阿闍世。(此時まで手に持つてゐた落又草の花を卓に叩きつけて、すつくと立ち上がる。ぱつと眞紅の花辨が

飛散する。) 何! 供養せられた時は食べる? ふん。鳥や獸を狩りあるくものは救い難い惡人で、「供養」といふ尊い名のものに衆生の手からその肉を強奪して召し上がるのが御出家様だ! いや、それだけならば我慢も出来るが、今の今まで鳥獸の肉に舌鼓を打つてゐたその舌が忽ち微妙の音聲をいだして五戒をお説き召されるのだ! 何といふ矛盾だ。何といふ不條理だ。(胸の底からむくれ上つて来るあるものを抑えることが出来ぬやうに室内をくるくると歩き出す。)

この時正面遙かの右の隅の楮より目連と頻婆娑羅王と相並んで靜かに廣庭に現はる。遠き爲に年齢などはよく分らぬが、目連は四十歳乃至五十歳の間らしく、黄色の僧衣をつけ、眞直に前方を見詰めて極めて徐々に左の方へ歩む。頻婆娑羅王は七十歳以上に見え、純白の寧ろ僧衣に似た衣、胸のあたりまで垂れてをるらしき長き髯、少しうつむき加減にして目連の左側に並んで靜かに歩む。その様は一見非常に、高き心境に到達せる聖者が瞑想に耽りつゝすゞる歩きしてゐるやうにも見え、又見様によつては魂をうちこんで目連のはなしに傾聽してゐるやうにも見える。

雨行。(姑くぼんやりと阿闍世を眺めてゐたが、態てなだめるやうに) 太子様。畏れながら、それは

餘りに……。わたくしは沙門の掟のことはよく存じませぬが――

阿闍世。(雨行の言葉を耳に容れやうともせず昂奮した調子で獨白のやうに續ける。) さうだ。彼等は偽善者だ。彼等はからつばの道學者だ。彼等は彼等の聰明と雄辯と白痴齷の聖者の假面を以て巧みに愚民を操り回る操り人形師だ。彼等は愚民を操る爲に巧みな哲學を拵へる。さうして滑かな辯舌を以て人の心を蕩かしてしまふのだ。だが、さうして捏ね上げた哲學が何だ。辯舌が何だ。わしはあゝいふ操り人形師共のお説法に迷ふてをられる父上を悲しむのだ。

雨行。(黙つて悲しく阿闍世を見まもつてをる。)

この時阿闍世遙かの彼方を靜かに並んで歩める目連と頻婆娑羅王とを見つけて遽然として立ち停る。ちつと目を据えて見る。次第に息だわしき昂奮に襲はれる。

阿闍世。雨行！ あの父上の姿を見い。あの聖者のやうに取り澄ました目連の傍を影のやうに歩いてをられる父上の姿を見い。(短き間。) あれが沙門のお説法に酔はされ

て魂の抜け殻になつた人の姿だ！ あれが灰色の釋迦の教へを以て民衆の生きた魂を一樣に塗りつぶさうとする王者の姿だ！ あれが「無告の民」の苦しみを憐れんでたつた一人の王子の遊獵を停止しやうとするお慈悲深い王様の姿だ！

目連と頻婆娑羅王との姿は正面左の方にかくれる。

雨行。(深き溜息を洩して) あゝ、大王は今どんなに深く太子様の御身の上と人民の平和とについて宸襟を悩ましてゐらせられることとせう。その大王の遣瀨ない御胸中が、少しも太子様にはお分りになりません。

阿闍世。(きつと雨行を見て) 雨行！ そちはわしが故意に父上の信條に反抗したり酔興で獵りに出掛けたりするやうに思ふてゐるのか。そちはこの宮殿の壁の中に圍まれて引籠つてをらねばならぬ雨の日などはどんなにわしに取つて不幸な日であるかを知らないのか。わしの弓の弦の音が羯布羅の深林に木靈を呼んで鳴り響く時――さうだ、その時ばかりが絶えずわしの胸の上に重々しくのしかゝつてゐる正體の知れ

ぬ黒い影から救はれる時であるのを知らないのか。……

雨行。(忽ち何物にか脅かされたし如く、阿闍世の眼を凝視する。)

阿闍世。雨行！ そちはわしの胸が子供の時分から不思議な不安と疑惑とに閉ぢられてゐたことを知つてゐる筈だ。日光を恐れるいぐさ麤鼠のやうに暗い道へ暗い道へと向つて來たわしの幼い魂の足取りを見てゐる筈だ。わしが十五や十六の年少の身を以て進んで方々の戦ひに出掛けたのはその爲だつたのだ。だが、わしがそれらの光榮ある勝利の戦から凱旋した時に、この王舎大城の高き門も揺らぐやうな人民の歡呼の聲の中に獨り淋しく小鳥のやうに顫えてゐるわしの魂のすゝり泣きの聲を誰れも聞いてはくれなかつたのだ。(間。忽ち何もかの閃光に照らし出されし如く) さうだ。雨行、鍵はそちの手にあるのだ。わしのこの眞暗い胸の扉を開く唯一の鍵が！

雨行。えつ！ (たぢろく。)

阿闍世。(雨行を凝視して) 雨行……。そちは今この王舎城に仕へてゐる第一の老臣だ。

摩竭陀の國の創業時代から父上に仕へて來た唯一の老臣だ。そちの眼はたゞ父上とそちのみにみ許される様々のものを見て來た筈だ。そちの手には色々の秘密の鍵が握られてゐる筈だ。わしは今それを感じず。わしはそちに頼む。さうだ、わしはそちの永年の忠勤と誠實とに信頼してそちに頼むのだ。どうしてわしは父上と本當に和らぐことが出來ぬのか、どうしてわしと父上との間に超えることの出來ぬ深い淵が横はつてゐるのか、そちはそれをわしに知らしてくれねばならぬ！

雨行。(たぢろく崩れんとして辛じて支へる。) 深い淵？ あゝ、もしそんなものがあるとするれば畏れながらそれは太子様御自身が堀られた淵に相違ございません。あゝ太子様！ もしあなた様が眞實にこの王舎城の平和を希念せらるゝならば、あなた様はもう少し素直に大王の大御心をお受取り下されねば……。

阿闍世。(進つて) 雨行！ そちはわしが好んでこの王舎城の平和を破らうとするやうに思ふてゐるのか。(ふつと涙ぐんで) 全體わしにはこれまで平和といふものが惠まれ

たことがあるだらうか。あゝ、わしは曾て「平和」の天使の幽かな羽風の音をも聞いたことはあるだらうか。(雨行何か言はうとする。それを抑えつけるやうに) 平和はわしの最も懂がれ最も眞實に欣求してゐる浄土なのだ！ (雨行再び何か言はうとする、それにかまはずに続ける。) けれども平和を覚める心が切になればなる程奇怪にもわしの心は均整を失つてしどろもどろになつて來るのだ。雨行！ そちはわしがこれまで幾度かこの暗い心を父上の胸に投げかけて救はれたいと思ひ惱んだかを知るまい。わしの心は眞直ぐにもものを眺め素直に人の心を受け取りたい願ひに満ちてゐるのに、何故父上に近づかうとするや否やわしの胸は怪しくも憤怒と叛逆の想念に亂れて來るのだ。わしはこの奇怪な想念を涙なしに見詰めたことはないのだぞ。わしは高々と道義の鞭を揚げてこの自らの叛逆の心をむちうつた。だが、その痛ましい鞭の下から迸り出づる凄愴な血の叫びをどうすればいいのだ。あゝ、わしの魂はこの永い恐しい愛憎相尅の苦闘に破れてしまつたのだ！

雨行。(眞着になつて吃りつゝ) あゝ、太子様。あ、あなた様は——

この時左の扉の外に俄にがや／＼と人の氣勢がする。雨行きよつとして口を噤む。阿闍世の遊獵に従つた家來の人々が俄に影をかくした主君を尋ねあぐんで歸つて來たのである。

侍臣の聲。(咎めるやうな調子で) あなた方は一體どうしたといふんです。太子様はもう疾くにお歸り遊ばしたのに……。 (家來衆の口々に何か言ふ聲す。) 叱つ！ 叱つ！ 靜かに。靜かに。

がや／＼した騒ぎ次第に鎮まる。

雨行。(すつかり打ちひしがれたやうに暗き聲にて) 太子様。……恐れながらあなた様は今日は餘りに昂奮してお出でなされます。わたくしは太子様のお心のお鎮まり遊ばされる時を待つて申し上げたい議もございませうが——

阿闍世。ふむ。(隣れむやうに雨行を見る。)

雨行。どうぞお心を鎮めて御休息下されますやうに。(一禮してよるめくやうに左の扉より退場)

する。

阿闍世。(ちつと雨行の後姿を悲しく見詰める。扉の外に雨行が消えると急に深き溜息を洩して)あゝ……。

(短き間。急に何か思ひついたやうに)さうだ！ (つかくと雨行を追ふて二三歩扉の方へ歩みよつたが

ふつと思ひかへしたやうに立ち停つて)駄目だ！ (ちつと空を見詰めて)あゝわしは何處まで淋し

い流人のやうにさ迷ふて行けばいゝのだ。(間)よし！ わしはわしの魂が苦惱の

重荷に打ち碎かれるまで足を踏みしめて歩いて行かふ。運命の與へる苦がい盃の最

後の一滴までも呑み乾さう……。

安樂椅子の上によろめき崩れて兩手に頭を埋める。——幕。

第二幕

第一場

伽耶丘上の提婆達多の僧團。

舞臺右手寄に榕樹の根が幾筋かの大蛇が入り交つてのたうつてゐるやうに蟠屈し、空よりは幾條の枝が幹のやうに垂直に垂れて地中に入つてゐる。その上を枝葉が茂つて鬱蒼として天を覆ふ。榕樹の後方、正面右の隅に殿として聳え立つた精舎の一部が覗いてゐる。

正面より左の側面にかけて多羅樹菩提樹など立ち並び、樹間より遙かに伽耶河の水面が白く光つて見られる。序幕より一ヶ月ばかり後。午過ぎの曇つた空。

榕樹の根の所に一人の若き比丘が片肌をぬいで無細工な手つきで僧衣の綻びを縫ふてゐる。

正面右の隅から三人の比丘が小聲で語りながら登場。その中の一人は精舎の窓の下に立ちとまり折から窓の中から顔を出した一人の比丘と何か領きながら語つてゐる。他の二人は精舎の角を回つてずつと向ふの伽耶河の方へ下りてゆく。窓の下に立つてゐた比丘もやがて前の二人を追ふて退場する。すべて話聲は聞えず。これらの比丘は何れも年齢が若くて、少し訓練の足りない正直な粗野な所が見える。

入れ違ひに提婆達多の高弟瞿伽離、同じく須那利多語りながら左の奥の樹間より登場。瞿伽離は三十五六歳。

熱しやすき顔をもつ。須那利多は三十歳前後、落ちついた、どちらかと言へば少し悒鬱な風申である。

須那利多。(鳥渡精舎の方を顧みて)……兎に角、問題はますます複雑になつて來ましたね。

瞿伽離。複雑と言ふよりも險惡と言つた方が本當のやうだ。

須那利多。(暗い調子で)まつたく。(考へて)では一體これからどう事件が開展して行く

とあなたは思ふ、瞿伽離。

瞿伽離。(無難作に)どうもかうもありませんまい。飛躍だ！ 大なる飛躍を要するのだ。

須那利多。(靜かに)飛躍とは？

瞿伽離。最後の手段を執るより外に道はなからうではないか。

須那利多。(黙つて瞿伽離を見る。)

瞿伽離。(少しもどかしげに)つまり釋迦の手を離れて完全に獨立するのです。獨立した

教團の根城をしつかりと固めて釋迦の教團を切り崩してやるのです。……

榕樹の根に掛けてゐる若き比丘を見つけて、ふつと口を噤んで立ち停る。須那利多も同時に立ちとまつて若

き比丘を注視する。

若き比丘は針をおさめ僧衣を正しく着て静かに立ち上り、黙つて二人に叮嚀に會釋して精舎の方へ退場する。

須那刹多。(見送つて獨白の如く) 若いのに珍らしく落ちついた顔をしてゐる。(瞿伽離に向ひ) あれも矢張り近頃卑地國の方から來た比丘の中ですね。

瞿伽離。(それには答へず、ちつと考くに沈んでゐたが、突然) 須那刹多! われは今大きな峠にさしかゝつてゐるのだ。この峠さへ越えれば廣々とした明るい平野がわれくの目の前に開けて來るのだ。

須那刹多。(静かに) さうかも知れない。(考へて) 所でその釋迦の教團を切り崩してやるつて奴ね。それが仲々容易に出來ることでは……。

瞿伽離。(遮つて) 出來るか出來ないかといふことは最早問題ぢやないのだ。出來ないまでも遮二無二ぶつかつてやつて見るより外に道がないのさ。

須那刹多。いや、わたしはその點では違つた考へを持つてをる。わたしはこの際提婆

尊者が静かに釋迦牟尼と別れて獨自の世界を歩んで行かれるのが本當だと思ふ。正直を言ふとわたしは餘程己前からこのお二人の歩んでをられる道が次第に違つて來たことを感じてゐたのですよ。それにも拘らず提婆尊者があゝして釋迦牟尼の傘下にかゝんでをられるのが不思議でならなかつたのです。だが、幸にして昨日の釋迦牟尼との會見によつて全く脈が切れてしまつた。さうだ、わたしは敢て「幸にして」と言ひたい。何故と言つて、自分の世界を開くものは自分自身より外にないといふ平凡な眞理を知る爲にわれくの師匠は度々可なり手酷ひ犠牲を拂はせられたのだからね。(蟠屈せる榕樹の根に腰を下ろして考へ込む。)

瞿伽離。(見下ろして) だが、須那刹多! あなたは昨日のあの竹林精舎の會見の光景を見ながらあの儘で事が済むものだと思へますかね。(潮のさすやうに次第に昂奮する。) 實際、昨日の釋迦牟尼の遣方はあんまりだ! 提婆尊者が釋迦牟尼の徒弟にあたられるといふやうなことは姑く言はないにしても、少くとも釋迦の教團にはわれくの

師匠程の傑出した人物は見當らないからね。それで師匠が大衆を統御して教團に漲つてゐる生温るい空氣を一掃しやうと請はれたのは至極當然のことだとわたしは思ふのだ。それに釋迦牟尼はもう寄る年浪だ。いゝ加減に身を引いて靜かに餘生を送るがいのさ。本當に今がいゝ潮時なんだ。それにどうだ、あの老人は一言の下にわれ／＼の師匠の提言を拒絶してしまつたではないか。「提婆達多よ、身の程を知れ——」かういふ調子だつたからな。「わしは舍利弗や目連にすら大衆を統御することを許さぬのぢや。況して汝如き自ら量ることを知らぬ愚痴の徒輩に……」(忿怒の爲にふつと言葉が切れる。聲を慄はして) 須那利多! わしはこの暴言を聞くと五體を走る熱い血潮が一時に逆流するやうに感じた。わしはあの粗傲な暴慢な釋迦の言葉が諸天の憎しみを脱れやうとは思はない! (拳を握る。)

須那利多。(冷靜に) だが、釋迦牟尼は矢張り大きいね。昨日の釋迦牟尼の態度は實に立派だつたとわたしは思ひますね。それにあのやうな峻烈な拒絶の言葉の裡に言ふ

に言はれぬ温かい心持が流れてゐたやうにわたしは思ひました。尤も恐らくその温かい心持が提婆尊者に素直にうけ容れられたとは思へないがね。

瞿伽離。(霎時ちつと須那利多を見詰めて) あなたは昨日の提婆尊者の哀切なる提言にちつとも同情を持つてゐないやうだね。ふむ、わたしは尊者の信任を受けてゐるあなたが……。

須那利多。(遮つて) 瞿伽離! 誤解してくれては困る。わたしはたゞ尊者の申し出を拒絶した釋迦牟尼の方にもある正常な理由を認めたいと思ふてゐるまでですよ。實際釋迦牟尼が成道(じょうどう)を宣言してから四十餘年の永い間如何に教團の和合といふことに魂を打ち込んで歩いて來たかを考へるならば、あなただつて提婆尊者の提言を退けた釋迦の心持が分らねばならぬ筈だ。何故と言つて大迦葉(だいかによう)のやうな長老を始め多くの俊才が雲のやうに釋迦牟尼を取り巻いてゐるのだからね。提婆尊者に大衆統御の大任を負はせたならば教團は忽ち動搖するのは見え透いてゐるからね。……

瞿伽離。(押し黙つて苦々しげに須那利多を見下ろしてゐる。)

須那利多。だが根本の理由は提婆尊者が自ら自分自身を信じてをられる程に釋迦牟尼から信じられてゐないといふことだ。いや、舍利弗や目連の半分程も提婆尊者が信じられてゐたならば、……

瞿伽離。(怒つて遮る。畜生ツ！ おれはあいつ等の名を聞くと思々しくなつて来る。)

(氣負ふた調子にて)全體舍利弗が何だ！ 目連が何だ！ あいつ等は釋迦の信任を笠に着て教團の人々を眼の下に見くだしてゐる。智慧第一だ、神通第一だなど、衆愚に煽てられていゝ氣になつて聖者になりすましてゐる。ふむ、あの胡麻化し上手のいかさま者共奴が！

須那利多。(微笑んで靜かに、寧ろ獨言のやうな調子で)だが、矢張りあの二人には多くの人々に推されるだけの重厚な所がある。あの人々が始めて釋迦牟尼の弟子になつて新しい沙門の衣を着けた時には、誰れの眼にも法臘六十を超えた端嚴なる比丘のやうに見

えたさうですからね。それがやうやく二十歳餘りの青年時代の話だからね。わたしは舍利弗と目連とが元の師匠の刪舍耶老人をすて、釋迦の教團に入つた時に刪舍耶は絶望の餘りに口から熱血を吐いて死んだといふのも尤もだと思ひますね。

瞿伽離。須那利多！ 貴公がいくら口を極めて舍利弗や目連を稱讚しやうとそれは貴公の勝手だ！ 唯、われ／＼は今あの男等に對してどういふ立場にゐるかといふことを忘れて貰ひたくないと思ふのだ！

須那利多。(遽かに立ち上り、ちつと瞿伽離を見詰めて)なぜ瞿伽離？ あなたは舍利弗や目連の大きさを認めることがわれ／＼の師匠の天分を否定することになるとでも思ふのかね。わたしは提婆尊者の豊かに恵まれた天分を信ずる點に於ては決してあなたに譲らないつもりだ。たゞその天分に對する餘りに強い自信が無際限にのさばり過ぎてわれ／＼の僧團を危地に陥れはしまいかと恐れるのです。(やゝ和陸的に) まあ、考へても見るが、今では提婆尊者もあの豪邁な阿闍世太子の手厚い崇敬によつてか

うして立派な精舎も出来、それに卑地國からは新たに五百の弟子が随ふて来るし、丁度朝日の昇るやうな勢ではあるが、明日の太陽はどういふ影をわれ／＼の師匠に投げるか保證が出来ないではありませんか。何故と言つて、阿闍世太子は何と言つてもまだお年若なことではあり、年はとつてをられても頻婆娑羅王が釋迦の教團に心身を打ち込んで恭敬くせうのまことを運んでをられるには比べることが出来ないではないか。……それに、卑地國から来た五百の弟子だつて多くは訓練の足りない野育ちの手合ひのやうだしね。わたしはあれ等の比丘達にわれ／＼の師匠の生活が分らうとは思はれない。寧ろわたしは師匠があゝいふ人々を信頼してをられるのが不思議な位に思はれるのです。

瞿伽離。(鏡く)不幸にして師匠は卑地國の弟子よりももつと信頼することの出来ぬ人物を信じ切つてをられるのだ!

須那利多。(眼が光る。)何! (強く自分を制して努めて静かな調子にて)いや、わたしのもの、

言ひ方が良くなかつたかも知れない。だか——

瞿伽離。(耳にも容れずに昂奮して)あなたの言ふことは一々わしに快く響かない! あなたは何時もわれ／＼の前途に暗い影を投げかける。あなたはわれ／＼の僧團を愛してゐない。あなたは提婆尊者を尊敬してゐないのだ!

須那利多。(屹と瞿伽離を見詰めて)どうして! 尊敬してもゐない師匠のもとにどうしてわたしが居られるのだ!

瞿伽離。あなたは師匠を絶対に信じてゐない!

須那利多。(うちのめされたやうに沈黙する。姑くして咳くやうに)おゝ絶対に信ずることの出来る人があつたらおれの魂はかうも永い放浪の旅にさ迷はずともいゝ筈だつた。……おれは静かに考へなくてはならない。(瞿伽離に向ひて)失敬する。(右手榕樹のうしろの方へ退場する。)

瞿伽離。(見送つて)ふじ。相變らずだ。(間。考へ込む。忽ち暗い不安の影が眉を走る。)まさか——

(間。)だが、あれはもう一度はつきりとあの男の肚はらをさぐらねばならない。禍を蕭牆の間に起すといふことはこの場合殊に禁物だからな。(須那利多を追ふて考へながら右手に退場する。)

提婆達多、阿闍世と語りつゝ右奥の精舎の方より登場。提婆は五十七八歳、年齢よりも三つ四つ若く見え、肥り肉の、それでゐてかつちりと身の引きしまつた堂々たる風采である。眸子の中に青年のやうな輝いた希望の光と、或る人知れぬ焦燥の影とが交錯して漂ふてゐる。阿闍世は睡眠不足にも似た充血せる暗い眼を据え、やううつむき加減に提婆と並んで歩む。

提婆。(幽かに微笑んで)……ほう、それで態々わしを訪ねて來られたのですね。ほんの一場の夢の爲に――

阿闍世。(遽かに立ちとまり、やゝ不興氣にちつと提婆を見詰めて)ほんの一場の夢の爲に？ (再び歩み出す。)

提婆。(依然として微笑みつゝゆつたりと歩みながら)さうです。縦令どのやうな不吉な悪夢であらうとも夢は要するに夢に過ぎません。實の所、わしは高が一場の夢に追はれて

逃げ回るやうなあなただとは思ひませなんだのぢや。

阿闍世。(再び立ち停る。ピリ／＼と神経的に眉が動く。)高が一場の夢？ (短き間。)ふん。わたしはさういふ冷たい調子でものを言はれるあなたにお逢ひしやうと思つて遙々この伽耶の丘上へやつて來たのではなかつた筈です。(ある自制を以て)提婆尊者！ わたしは敢て言つて置きますが、わたしが如何に恐しい悪夢に魘されやうともその夢の中に現はれた人間が自分に最も親しい最も尊いものでさへなかつたならば、わたしの頭はかうまで攪き亂されなくともよかつたでせう。いや、寧ろその悪夢が現實に現はれて來る時を興味を以て待ち望んだかも知れないのです。何故と言つてその時こそは永い間戦ひに飢えてゐるわたしの赤い血潮を快く沸き立たせることが出來やうといふ譯ですからね。唯恐しいことは、その強弓を引き絞つてわたしの側腹を射通した野武士等の後にわたしの父が眞蒼になつて立つてゐたことです。父が暗い眼を据えてちつとわたしを睨んで、「あれだ！ 早く射よ！」と鋭く下知を下した時に

わたしははつと思ひました。到頭その時が来たんだといふやうな氣持がしたのです
(姑くちつと洞のやうに空を見詰める。忽ち自ら嘲るやうに淋しく笑ふ。) ははは言はれて見れば尤も
 だ。「高が一場の夢」に過ぎないものをな。(不興氣に提婆達多に目禮して悠然として上手に去らんとする。)

提婆。(屹と口を噤んで冷徹な眼差しをしてちつと阿闍世を見詰めてゐた眉のあたりにある閃きが一過する。忽ち呼びとめる。) 太子！(阿闍世二三歩にしてふりかへり止まる。) あなたは間違つてゐる。あなたの夢はあなたの明日の運命を豫言してゐるのではない。それはあなたの遠い過去の宿命を物語つてをりますのぢや。

阿闍世。(愕然として) 何！(釘付にされたやうに提婆を見詰めてゐたが、やがて突然笑ひ出す。) はははははははは提婆尊者。はははははは。

提婆。(屹と阿闍世を見据えて) 太子！ あなたは不可思議な宿命を負ふてこの世へ出られました。その恐しい秘密は王舎城に仕へてゐる老臣達に知れ渡つてをるのです。

阿闍世。(はつと思ひ當る所あるものゝ如く恐しく緊張して提婆達多を凝視する。)

提婆。そればかりか人民の中にもその秘密を知つてゐるものが多いと見えます。と申すのも實は蔭であなたを嘲つて婆羅留枝太子と呼んでゐるのを聞いたことがありますので。いや、京童といふものは何時の世にも口善惡ないものであります、ははは。

阿闍世。婆羅留枝？ ふむ——(考へる。)

提婆。(姑く黙して後靜かに) 太子、お氣にさへられては困りますが、下々の者共は指の折れた不具者と呼んで婆羅留枝と言つてゐるのです。

阿闍世の顔は突然鞭で打たれたやうに堅くなる。不可抗的の魔力にうち負かされたやうに覺えず左の手を揚げてちつと見詰る。小指の第二の關節よりさきが切れて無くなつて癒着してゐる。阿闍世の顔は見る／＼うちに憤怒と羞恥とで眞赤になる。

阿闍世。(強き自制を以て) ふむ、この小指のことか。全體、こ、この小指は——(切り落したやうにぶすりと言葉が途切れる。)

提婆。(半ば旁白のやうに) わしは餘計なことを言ひ出したやうだ。

阿闍世。いや、提婆尊者！ (次第に平静をとりかへして) わたしはわたしの魂がどれほどまでに屈辱の重荷に堪えることが出来るかを知りたい。わたしのこの小指は一體どうしたのです。(ちつと提婆を見詰める。)

提婆。(黙つて考へる。)

阿闍世。(暗き聲にて) わたしはわたしの淋しい不幸な性格とこの傷ついた小指とに何かしら必然の暗い繋がりがあるやうな気がする。わたしは子供の折りによくこの小指はどうしたのだと言つて家來の者共や采女などに訊いたことがあつた。すると彼等は皆困つたやうな顔をして黙り込んでしまひました。到頭或る時わたしの母に訊いたのです。母は俄かにさつと顔を曇らして姑くちつとわたしを見詰めてゐたが、聽てそれはお前の小さい時分に怪我をしたのだと言ひました。さうしてはらくと涙を滴しました。(間。何か思ひ當る所があるやうに) おゝさうだ。それ以來わたしの母は

どうかすると何物かを捜すやうな疑ふやうな眼をしてわたしを見るやうになりました。その頃からです、わたしの小さい魂が孤獨の淋しい曠海にさ迷ひ始めたのは

——(眼を閉ぢる。)

提婆。太子！ あなたの魂は本當に永い間漂泊の旅をつゞけて來られました。

阿闍世。漂泊の旅？ あゝ、さうだ。わしの魂は永い漂泊の浪にうたれて疲れ切つてゐるのだ。尊者！ あなたは今こそ安穩な港をわたしにさし示して下さらねばなりませんね！

提婆。その港の岸にも恐らく激しい浪がぶつけてをりませう。けれどもその浪を乗り越えねばあなたの魂は救はれない。太子！ あなたのその不自由な小指には凡そこの地上に又とあるまじき不可思議な業因縁が絡まつてをりますのぢや。……

阿闍世。(暗い豫想に慄えつゝ提婆を凝視する。)

提婆。その小指はあなたが生れられた時にあなたの母上韋提希夫人によつて切り落さ

れたのでありますぞ。

阿闍世。(眞蒼になつて) えつ! (せき込んで) わしの母がどうして……どうして……。

提婆。あなたの母上は高樓の上から文字通りあなたを地上に産み落したのです。そこには幾十筋の長穂の槍がもの凄くきら／＼ときらめいて生れ出づる小さい王子を刺し貫かうと待ち構えて立つてゐました。所が不思議にも王子は助かつた。左の手の小指の先きを切り落されたばかりで危く命を取り留められた。……

阿闍世。(霎時惘然として提婆を見詰める。忽ち我知らず、よろ／＼とよろめきつゝ呻くやうに) 尊者!

提婆尊者! そ、それは昔の……昔の……物語ではありませんか。お、さうに違ひない! さう、さうだと言つて下さい尊者——

提婆。(平明な調子でつゞける。) 御父君頻婆娑羅王を始めすべての宮廷の人々はこの狂はしい奇怪な事實を永久に眞暗い過去の扉の中に葬り去る爲にありとあらゆる苦心を凝らし、周到な注意を拂はれました。けれども多くの秘密は遂に明るみへ出なければ

ならぬ運命を持つてゐるやうに、この殘虐な血みどろな秘密が驚くべき速度を以て人々の耳へ呷かれて擴がりました。大王の權威を以てもそれを防ぎとめることが出来なかつたのであります。

阿闍世。(かすれたやうな聲で) さうしてわしの耳だけがその呷きを聞かなかつたのか。

(息だわしき間。) だが何故わたしの母はわたしの小さい柔かい魂をさうも殘虐に殺さうとしたのです!

提婆。あなたの魂の成長を恐れたのです。あなたの魂が強くなつたならば屹度あなたの母體を害するに相違ないと思はれたのぢや。丁度あの眞黒い迦羅々の蟲が生れると必ずその母親を食ひ殺すやうに——

阿闍世。(せき込んで) だが、だが、わしはわしの母のたつた一人の愛兒ではなかつたのか。たつた一人の愛兒が何故迦羅々の蟲にならねばならぬのか!

提婆。それは大夫人が占相師の言葉を信ぜられた結果です。あなたが程なく生れられ

やうとする時分に交る／＼王舎城の宮殿へ召し出された有名な占相師達は何れも口を揃えてこの王子御成長の晩には必ず大王を殺害せられるに相違ないと申し上げました。大夫人はこの恐るべき豫言を聞いて慄え上つて愕かれた。さうして密かに思愛の情の纏れぬうちに生れ出づる小さき者を殺してしまふ決心をせられたのです。

阿闍世。(叫ぶやうに) あゝ何といふ話だ！ そ、それがこのわしの話だとは！ (怒り元めるやうに) だが、わたしの母は何故そんなくだらぬ豫言などを信ぜねばならなかつたのです。提婆尊者、あなたはわたしを果て知れぬ迷宮の奥へ奥へと連れて行かれる。わしは一瞬にしてこの不可思議な迷宮をぶち壊はさねばをられない！ わしは最早我慢が出来ない！ (苛々する。)

提婆。(静かに、はつきりと) 大夫人がこの奇怪な豫言を怖れられたには深き理由がなければなりません。太子！あなたは父上頻婆娑羅王の老年に入られてからの王子であることを想ふて下さい。人生の秋を過ぎやうとして世嗣ぎの王子の無いといふことは

47

一國の大王に取つてどんなことでせうか。殊にお若い時分から永年の間兵馬倥傯のうち往來してこの摩竭陀の大王國を建設せられた大王に取つて！事實、大王は久しい間堪え難い寂寥と哀愁とに悩まれた揚句に、その頃王舎城下の市民の間に神のやうに尊敬せられてゐた一人の仙人を宮殿へ召し出されて、予は何の罪によつて一人の王子も恵まれないのかと怨むやうな暗い絶望の調子で訊かれたのです。太子！あなたはその仙人が瞑目一番の後に畏れながら大王には屹度遠からずして玉のやうな王子をお揚げ遊ばされるに相違ございませぬと申し上げた時の大王の輝いた顔を想像することが出来るでせう。大王は喜悅の聲を揚げてせき込んで王子誕生の時節を下問せられました。すると仙人は重ねて静かに申し上げた。大王！ 今毘富羅山に五神通を具へた一人の尊い苦行者がをります。その苦行者は茲三年の後には永い苦行の幕を閉ぢて入滅いたします。さうして直ちに大王の王子となつて生れ出づる宿命をもつてをるのでございますと。大王は深く嘆息してあゝ予は三年といふ永

い年月を空しく待つには餘りに齡が傾よほぶいてゐると言つて、直ちに家臣を毘富羅山へ遣して無謀にもその苦行を射殺されたのぢや。

阿闍世。(鋭く叫ぶ。) あつ！ (危く昏倒せんとして辛じて自ら支へる。)

提婆。(語調を強めて) 苦行者は永年の苦行が完成されずに九似の功を一簣に虧くことを悲しんで慟哭しました。怨みました。憤りました。さうして遂に眦を裂いてその殺戮者を睨みつけて大王に對して怖るべき呪ひの言葉を叫んで斃れたのです。さうして、それから十ヶ月の後に勦い運命の手があなたの母上を通してもう一度この悲しい魂に迫つたのであります。

阿闍世。(狂はしく叫ぶ。) あゝわが父と母とはわしの生れながらの仇であつたのか！ あゝ何といふことだ！ (よろめく足を踏みしめて屹と虚空を睨みつけて) わしは怨む！ わしは憎む！ あゝ何といふ恐しい胃潰だ！ あゝわしはかゝる悪むべき胃潰が白日の下に行はれ得るこの閻浮提の世界を呪ふ！ あゝ比馬刺耶ひまざりやの峯よ崩れよ！ 恒河かんがの水

よ流れをとめよ！ 汝等はこの殘虐な魂の受難の呻きを聞きながら何故冷然として聳え立つてゐるのだ！ 何故悠々として流れてゐるのだ！

提婆。(冷厳に阿闍世を見詰めて) 太子！

阿闍世。あゝ、あの父の穩かな眸子の奥に顫えてゐる怪しい疑惑の色は今こそその正體を暴露した。母の額に執念くも刻まれてゐる疑いと怖れの黒い影は今こそはつきりとその本性を現はした。あゝ二十年來わしの胸の底に陰慘として澱んでゐた恐しい闇黒が今こそ明るみへ引き摺り出された。あゝわしの太陽はわしの歴史の第一章からして曇つてゐたのだ！ あゝわしの魂は永劫に苦より苦に冥みやより冥みやに流轉するやうに宿命の鐵鎖に繋がれてゐるのか！ (よろめき倒れんとする。)

提婆。(急ぎ阿闍世を支へて、絶望的な阿闍世の眼の中へ恐しい魔力を注ぎ込むやうにぢつと見詰めて) 太子！

宿命の鐵鎖は斷ち切られねばならない！ あゝ今こそあなたの魂の救はれる時が來たのですぞ！

阿闍世。救はれる時が——（提婆の手を離れて、しつかりと自分を支へて燃きつくやうに提婆を凝視する。）

提婆。さうぢや。あなたの尊い魂を痛ましい窒息と不條理な滅亡とから救ふものは只あなたの腕に漲つてゐる力のみぢや！ あゝ今こそあなたが敢然としてあなたの父上に向つて立つべき時が來たのですぞ！

阿闍世。（霎時ちつと提婆を見詰めてゐたが、急にがっくりと喪心して） あゝわしはこれ程恐しい幻滅が來やうとは思はなかつた。……あゝ、わしはどうすればいいのか。……分らない。……分らない。（混亂する）

提婆。太子！ あなたは絶えず復讐を恐れて戦いてをられる父上の卑怯にも醜い相が見えないのか。丁度この（手を揚げて舞臺左の上手を指して）伽耶の河上に浮んでゐる水禽が一刻も水を離れて生きられないやうに、あなたの父上は絶えず釋迦の弟子共の生温かいお説法に浸つて現實の暗さを胡麻化さねば生きられないのぢや。太子！ 自

らの魂の獨尊の光を輝く爲にすべての醜きもの、すべての偽はれるものを打ち摧き去るといふことがわれ／＼の第一の信條ではなかつたか。あゝ、この混沌として澱んでゐる大宇宙の真中へカ一杯に打ち込むべき「金剛の杵」は今われ／＼の手に恵まれてゐるのですぞ！

阿闍世。（益々混亂して） あゝ——

提婆。太子！ 「父」といふ名によつてあなたを脅かさうとするものは凡て惡魔に食はせてやるがいい！ 見よ、その昔あの豪壯なる羅摩王が自らの父を弑して萬乗の尊を宣言せしよりこのかた、跋提大王、迦帝迦王、月光明王、日光明王、特多人王など無道の父を殺害して王位に即きし先蹤はわが天竺の歴史の上に限りなく列なつてゐるではないか。頻婆娑羅王はあなたの「父」といふ尊い名に價しない冷酷な利己主義者です。似非聖者です。この賈物のかうべから大王の寶冠を奪ひ取るといふことは眞實を求めて精進する勇士に取つては馬前の一塵を拂ふにも價しない筈です

ぞ！時は来た。さうして道はたつた一つです。この一筋の道のみがあなたの尊い魂を新しい空気に明るい日光の漲つてゐる自由の世界に導くのでありますぞ！

阿闍世。(暗く、半ば獨白のやうに) あゝ、道はたつた一つしかないのか。

提婆。(釘を打つやうな調子で) 阿闍世太子の道はたつた一つしかない！さうして提婆達多の道も一筋ぢや！(豫言者のやうに輝いた眼を以て) 太子が父王の老骨を打ち砕いて大王の位に即かれる時に、提婆は寂靜じやくじやうの涅槃を夢みてゐる釋迦を葬つて新しい力の世界を開くであらう。

阿闍世。(稍々長きうつろのやうな間。咽ぶやうに) あゝ、道はたつた一つしかないのか——

阿闍世、提婆の足元によるめき崩れる。提婆冷厳な眸子を以て阿闍世を見下ろす。——幕。

第二場

舞臺序幕にかへる。たゞし中央の卓がのけられ、正面の扉は鎖されてゐる。それから因陀羅の神の前の帷が全く繰り開かれて、素樸雄渾な彫像の全身が墜するやうに立つてゐるのが見える。

第一場と同じ、夕暮れ近く。

舞臺時空虚、阿闍世深き苦悶の色に沈みつゝ、左下手の扉を排してよろめくやうに登場する。

阿闍世。(暗い底光りのする眼を以てさぐるやうに室内を見回して) 何といふ暗い沈んだ空気だらう。まるで牢屋のやうだ。(つか／＼と室を横切つて右上手の帷を排して出でんとし、思ひかへしたやうに頭を振つて引きかへし右側の座榻の上に身を投げる。) あゝ——(兩手で頭をかゝへて姑く沈吟する。) かうしてはをられない。(突然立ち上がる。) しかし、かうつと……。(室内をぐる／＼歩き出す。) あゝどうしやうといふのか。おれは亂れてゐる。混亂してゐる。もつとしつかりと落ちつかなくてはならない。もつと落ちついて考へなくてはならない。(遽かに立ち停りて) だが、一體おれは何を考へるのだ！おれのやうな暗い宿命を負ふて生れおれのやうな永いじめ／＼した道を辿つて来たものは——さうだ。提婆達多は今おれの選ぶべき唯一の道をはつきりとさし示してくれたのだ。提婆はおれの眼を開いてくれた善知識だ。いや、善知識か悪知識かそれはおれには分らない。そんなことはどうでも。

いゝのだ。(問) あゝ、それにしても……。 (忽ち恐しい暗い想念に襲はれてたぢろき崩れんとし
て、ふと因陀羅の彫像に眼がつく。愕然として) あゝあの眼！ あの鋭く輝いた眼！ それに
あの張り切れるやうに力の漲つた^{かぶせ}腕はどうだ！ (よろめくやうに彫像の前に近づき跪く。) あ
ゝ因陀羅！ 汝諸天の司なる神よ！ あゝ、雷神を驅り風伯を叱咤し雨師を^{よしま}麾ねい
て四天に號令せらるゝ力の神よ！ あなたは新しい空氣と明るい日光の漲れる世界
はそれに應はしい價を拂はずしては恵まれないことを語つてをられます。あゝ因陀
羅！ わたしは今こそわたしの全心をさへ上げてあなたの力と輝きとに歸命いたしま
す。(黙禱する。)

長き間。

阿闍世。(靜かに立ち上る。二三歩うしろさまに退きて、ちつと空を見詰める。呼ぶ。) 誰れか！

侍臣。(下手の扉より登場。) お召しでございませるか。

阿闍世。耆婆を呼べ！

侍臣。あの耆婆大臣でございませるか。

阿闍世。さうぢや。

侍臣。(躊躇ひつゝ) 耆婆大臣は竹林精舎の方へ行つてをられるさうでございませますが……。

阿闍世。(不興氣にちつと侍臣を見る。)

侍臣。(恐るゝ) 世間の噂によりますると、何でも程なく耆闍崛山^{せりやくせん}に於て釋迦如來様の
大説法が始まるとか申すこととでございませす。それで耆婆大臣が大王様の御命令によ
つて大衆の沙門を供養する爲に大勢の家來衆を連れてその方へまゐつてをられるの
ださうでございませす。

阿闍世。(苦々しげに) ふん。また例の御説法か。(旁白) だが、あのやかましい耆婆がを
らぬのは結句好都合かも知れない。(侍臣に向ひ) では、急いで雨行を呼ぶのだ。

侍臣。畏まりましたでございませす。(一體して急ぎ退場。)

阿闍世。(何か考へるやうに侍臣の後姿を見送る。その姿が扉の外に消えると、眩くやうに) だが、雨行を

呼んでどうするのだ。(間)又あの人のいゝ老人の泣き言を聞かうといふのか。(間)それともあの老人の口からもう一度提婆達多の言葉を確めやうといふのか。(間)突然飛び上がる。)おゝさうだ! 此間おれが危く婆羅門の修行者を射殺さうとしたことを話した時に、あの老人は眞蒼になつて激しく唇を痙攣させてゐた。あゝ、あの奇怪にも突然な愕きと怖れとは提婆達多によつて白日の下に曝らされたおれの陰惨たる過去の記録に裏書してゐるのだ! (新たなる烈しい忿怒を感じて屹と口を噤んで空を睨む。) 長き間。

舞臺次第に暗くなる。上手の扉を静かに排して一人の侍女灯臺を持ち出て来る。薄暗がりの中に立つてゐる阿闍世を見付けてぎよつとして入口に立ちとまる。直ぐにその愕きを制して、鞠躬如として室内よき所に灯臺を置き、恐るゝ阿闍世に一禮して退場する。

侍臣。(一禮して) 申し上げます。雨行大臣は急病の爲に床に就いてをられる様子でございます。

阿闍世。急病? 容態はどうぢや。

侍臣。可なり重態らしく思はれ申す。雨行大臣邸の家來衆の話により申すれば、何でも大臣は此間から餘り氣分の勝れぬのを押しして參内してをられたさうでございますが、今朝大王様の御前に於て他の大臣達と激論を闘はされ、それが爲に俄かに御病氣が悪くなつて急に御前を退かれた模様でございます。

阿闍世。(眼が光る。) 何! 激論を? あの諍ふことの嫌ひな雨行が——(考へる。嘲るやうに) ふん、又あの大臣共が厳しくわしを批難したのであらう。さうしてあの老人を怒らしたに相違ない、(忽ち或る黒い暗示を感じて思はず叫ぶやうに) いや、それどころでは

——(ふつと言葉を切つて眼を据える。間。頷いて) よし! (侍臣に向ひ) 家臣の長を呼べ!

阿闍世。急いでぢや!

侍臣。はつ! (急ぎ退場。)

阿闍世。(侍臣の出て行つた扉を睨むやうに見詰めて) さあ時が来た! おれの若い魂を十重に二十重に取り巻いてゐた鐵の鎖を断ち切る時が来た!

阿闍世虎のやうに室内を歩き回る。ばらばらと庭の立木の葉に音を立て、雨が通り過ぎる。阿闍世正面の扉の近くに立ちとまりてちつと耳を傾け、また歩き出す。霎時して再び急に立ちとまりて風の爲にゆらくする灯火をちつと見詰める。それから又歩き出す。

左の扉の外に足音がする。阿闍世急に立ちとまつて、ちつと扉の方を見る。侍臣に導かれて武將二人登場。一人は三十七八歳、他の一人は三十一二歳、何れも屈強な武士である。侍臣は後方よき所に立つ。

武將一。(恭しく一禮して) お召しによつてまかり出でましてございます。

武將二。(同じく) 何ぞ急ぎの御用向でも……。

阿闍世。(武將二の言葉を奪ふやうに) 火急な用ぢや。(嚴然とした調子で) すぐ戦ひの用意をせ。

5-

武將一、二。(同時に) えつ! (顔を見合はす。)

間。凄愴なる沈黙。

武將一。(無るく) あの、戦ひの用意をと仰せられるのでございますか。

阿闍世。さうぢや。

武將一。出陣は何れへでございますか。

阿闍世。大王の御所だ!

武將一。えつ!

武將二。(同時に) えつ! 太子様、そ、それは……。

阿闍世。(断ち切るやうに進つて) わしは汝等にわしの命令に對して彼れ是れ口をさしはさむことを許したことはない筈ぢや! 汝等は唯わしの命ずる通りに實行すればいいのだ!

武將一、二。はつ。

阿闍世。(嚴かに) わしは汝等にわが父大王を捕えることを命ずる! 汝等は直ぐに士卒の者共を引きつれて大王の御所を襲へ! 手向ひするものは斬つて捨てよ、逃げ

るものは殺してはならぬ。大王には刃をあてるな。大王は擒にしてこの王舎城外の七重の牢獄に幽閉せよ。……大切に護送せよ。油断をして途中で大王を奪はれてはならぬぞ！

武將一、二。はつ。

この時沛然たる驟雨の音聞ゆ。

阿闍世。あゝ幸に雨が降り出した。雨夜の闇黒は夜襲には屈強ぢや。手ぬかりの無いやうにしつかりやれ！ そちは(武將一を見て)二百の士卒を率ゐて御所の正面から侵入せよ。そちは(武將二を見て)百五十人を引きつれて後宮の方を警邏して逃げ路を遮断せよ。間違つて同士討をするな。御所の衛士ムシや宿直とらの侍は小數であつても侮るな！

武將一。畏つてございませす。

阿闍世。急げ！

武將一、二。はつ。(一禮して退場。)

阿闍世。(侍臣に向ひ)今宵は殊に嚴重にこの宮殿を警護するやうに宿直の者共に命令を傳へよ！

侍臣。(茫然としてゐたが、始めて夢から醒めたやうに我れにかへつて)はつ。畏りましてございませす。(密かに溜息を洩しつゝ一禮して急ぎ退場する。)

太子妃婆滋羅上手の帷を排して轉げ込むやうに登場する。二十歳餘りの氣品ある美しき顔形。典雅なる羅の服裝。胸に瓔珞を飾る。恐怖と憂悶とに打ち碎かれてゐる。

婆滋羅。あゝ太子様！ あなたは……あなたは……。(阿闍世の脚元に身を投げて身悶えして泣く。)

阿闍世。(黙つて静かに、寧ろ冷たく婆滋羅を見下ろす。)

婆滋羅。(おろろくと泣きながら)あゝ太子様！ どうぞ思ひ止まられて……どうぞ思ひ止つて……。(ふと身を起して跪いて阿闍世にとりすがつて、哀願に満ちた眼を以て見上げつゝ)あゝ太子様！

太子様！

阿闍世。(ちつと婆滋羅を見詰める。静かに、しかし悲痛な調子を帯びて)婆滋羅！ お前はわしが父

婆滋羅。(同時に聞 耳を立てる。彈かれたやうに立ち上り、ふら／＼と正面の扉の方に近づき、絶望的に)あ
 ー(再びよろ／＼と牀の上に崩れて兩手に顔を埋めて咽び泣く。)

この時帷を排して阿闍世の息優陀耶顔を出して室内を窺ふ。五六歳の可愛らしき子。まる／＼と肥つてはゐるがどことなくひ弱さうに見える。婆滋羅の倒れてゐるのを見て愕いて室内へ飛び込んで、とりすがる。

優陀那。お母あさん！ お母あさん！ お母あさん！ あ、あ、あ、あ。(烈しく泣く。)

雨の音やゝ小止みになり関の聲一としきりやゝ高く聞え、それより次第に遠退いて、やがて聞えなくなる。間。雨の音やうやく歛まる。

阿闍世。(突然)あゝふら／＼する。何だか眼が舞ふやうだ。(よろめかんとして足をしつかりと踏みしめて)さうだ、わしは今恐しい懸崖に立つてゐるのだ。あゝ恐しい難行の嶮路だ！ わしは猿猴まじろのやうにがむしやうに嶮しい崖道を攀ぢ登つて來た。本當に猿猴のやうにー あゝ、わしは今こそ獅子にならねばならないのだ！ (ふと婆滋羅にとりすがりて歎歎してゐる優陀耶に眼がつく。始めて気付いたやうに愕然として) あゝ優陀耶うたやが。(姑くちつと優陀耶を見詰める。忽ち隕石の落ちたやうに暗い眼になる。間。突然優陀耶を抱き上げて、空を仰ぎて)

あゝ諸天よー この小さな者にはわたくしのやうな嶮難な路をお與へ下されませぬやうに。平安な道をお恵み下さいませすやうにー (抱きしめて) 優陀耶……優陀耶……。

阿闍世黯然として涙ぐむ。——幕。

第三幕

第一場

王舎城外、頻婆娑羅王を幽閉せる七重の牢獄の前。

右上手より正面へかけて僅かに斜に石造の外門が壓するやうに立ち鐵の扉が左右に開かれてある。その内側には更に圍ひがあつて鐵の扉が鎖されてゐる。石門には苔蒸し、扉は恐しく錆びてゐる。門の空には蒼鬱として樹の枝が重々に覆ひかぶさつて暗澹たる影をこの牢獄に投げ立てゐる。石門の左右へは高きがつしりとした石垣がつづく。その石垣の兩端は正面及び右下手寄に繁つてゐる多羅樹、阿梨勒樹その他の樹木の蔭の中に入れてゐる。正面左の奥へ樹木の間に一條の道が走り、その遙か向ふに王舎城の市街の一部が見える。

石門の右側には守門者一、二(何れも三十四五歳)左側には守門者三(二十六七歳)守門者四(四十歳近く)長劍を帶して嚴めしく立つ。正面右奥の樹間には長穂の槍を手にせる士卒五六人、出入してあたりを警邏してゐるのが見える。

等二幕より約三週日の後、午後。

右下手より左上へ、又は左の上手より右下手へ様々の階級の老弱男女行き交ふ。何れも憚るやうに遠くから門内を覗き込んで忿然として何事かを囁きつゝ通り過ぐ。一時時人通りが絶える。そのあとを一人の婆羅

門の行者(五十歳前後)牢屋の方を見向きもせず上手より下手へ悠々として大跨に歩みつゝ通り過ぎる。引き違ひに巡禮の老女婆羅跋提下手より登場。五十六七歳、みすばらしき服装、若き日の美を偲ばせるやうな顔形、永い年月の惱ましい背景を語る曇つた眉。門の正面遠くの所にて立ち停り門内に向つて靜かに合掌禮拜して、足を早めて上手に退場する。守門者一はつとした様子にてその後姿を見送る。直ぐに右下手より市民一、二、何れも四十五六歳、小聲にて語りつゝ登場する。

市民一。(考へ考へ)……矢張り業といふものかな。恐しいもんだ。如何に萬乘の君様でも業といふものは脱れ遊ばすことが出来ぬと見えるのう。

市民二。それはさうぢや。一國の大王様でもわれ／＼のやうな賤しい人民でもその點ではあんなじことさね。みんな夫々定つた約束といふものを持つて生れてゐるのぢやでな。そら、あの天人にさへも五衰とか言ふてな、もう果報が盡きかゝる時が來ると、次第々々に身體が衰へて、眉間より放つてゐた光が曇つたり、腋の下から汗が出たりするやうになるさうだからの。どうも仕方のないもんだな。

市民一。(嘆息して)それにしてもこれは又餘りなことだとおれは思ふがな。實際頻婆娑

羅王様はこの國の中興の英主と言はねばならぬ尊い王様だからね。それに又こんなにも慈悲の深いお心の寛い聖者のやうな王様はこの廣い五天竺にも昔からあるまいと思はれるがな。あれのお袋などは王様の御恩を忘れるなよ、王様の御恩を忘れるなよつて死ぬまで繰りかへし繰りかへして口癖のやうに言ふてゐた。王様のお蔭で永らく亂れてゐた世の中が泰平になる。人民は次第に殖へてこの王舎城の城下は年々に繁昌する。悪るい役人や酷い税吏は容赦なく黜けられて毎日の日暮しが段々と安樂になる。おまけに釋迦如來様やお弟子の方々の有難いお説法が聽聞出来る。こんな結構な御仁政は何處の世界にだつてあるもんぢや無いつて涙を浮べてお袋は始終喜んでゐたがな。あ、あれは今朝も女房に言ふことさ。こんな有難い王様が石の牢屋へ抛り込まれなされるやうでは世の中に善根功德を積む位馬鹿げたことはあるまいつてな——（守門者一、二の險しい眼顔に氣付き、ふつと口を噤む。）

市民二。（必々と同感するやうに）まつたくだ。本當に世の中が澆季になると何が起つて来る

ことやら分らんでな……

市民一。叱つ——（市民二の袖を引く。）

市民二ぎよつとして牢屋の方を顧る。二人俱に慌てゝ逃げるやうに急ぎ左上手に退場する。

守門者一。（市民等の後を見送つて舌打ちする。）チヨツ！ 忌々しい。来る奴も来る奴もみんなあれだ。

守門者二。まつたくだ。お上の御威光を恐れぬにも程がある！ うむ、不敬な噂をする奴は見付け次第に容赦なく引つ捕えて獄屋の中へぶち込むことにするがいのだ。

守門者一。それに全體こゝは街へ行く本通ではないのだ。これまではこんなに人通りのある處ではなかつた。殊に夕暮などには昔からこの牢獄の中で死んだ罪人共の怨霊が出るといふので人つ子ひとり影を見せぬやうな淋しい所だつたのだ。それが此頃はどうか。まるで王舎城下の目貫きの街のやうにぞろ／＼と人通りがある。おま

けに梅陀羅のやうな賤民共までがさも人間らしい顔付をしてぶら／＼通りやがる。一體あいつ等はまご／＼と何しに來やがるのか。

左上手より娑羅跋提再び登場。つゞいて蓮華色比丘尼登場。三十四五歳、豊麗なしかし久しい宗教的洗練によつて淨化された尊さをもつた顔形。一見永き旅より歸つたことを思はせる旅装をしてゐる。

娑羅跋提。(上手に立ち停り蓮華色を顧みて)あれです。あの恐しい牢屋の中に頻婆娑羅王様は閉ぢ籠められてお出で遊ばされるのでございます。

蓮華色。(立ちとまり釘付けにされたやうに遠く牢屋の鐵の扉を見詰めて)あゝゝ！(つか／＼と二三歩み出て)あゝ、矢ッ張り本當だつたのか—— あゝ何事でせう、これは！世にも稀れなる聖者が極重の惡人の罪に應はしいこの七重の鐵の扉の中に閉ぢ込められてお出でなされるとは！

守門者一。(二喝する)無禮者ッ！

蓮華色。(始めて守門者等に氣付ける如く、つか／＼と前に出て守門者等に度ましく一揖して)まことに申

譯がございませぬ。餘りに思ひがけない悲しい有様を見ますので、氣もそゞろに亂れてとんだ御無禮をいたしました。どうぞお宥し下さるやうに——

守門者二。(始からちつと蓮華色の顔を見詰めてゐたが)ふん。お前さんは釋迦の御弟子様だね。成る程有難さうなお顔をしてお出でるな。だが、われ／＼は釋迦の御弟子の御述懐を承る爲にこゝに立つてゐるのではない。早く去つたがよからう。

蓮華色。(自らを制して)御尤もでございます。(考へて)實は強つて一つお願ひ申したい議がございしますが。

守門者二。(冷たく)何かな。

蓮華色。わたしは頻婆娑羅王様には並々ならぬ御重恩を負ふてゐるものでございます。實は王様の御内意を受けて傳道の爲に暫く喬賞彌の方へ旅行をいたしてをりまして、たつた今この王舎城下に歸つた所でございます。さうしてこの(娑羅跋提を顧みて)巡禮のお方からこの大事變のお噂を承つて急に大地が揺らぐやうな愕きに打た

れことでございます。(涙ぐんで)あゝ、わたしは今王様の御恩徳を偲ぶ思ひで一杯でございます。本當にこの胸が張り裂けるやうでございます。それで誠に御無理なお願いでございますが、何様御覽の通りに世を捨てた出家の身の上でもございますれば、どうぞ特別の御僉議を持つて、たつた一と目王様に拜謁して御慰問の言葉を申し上げることをお許し下さる譯にはまゐりますまいか。

守門者二。(激しく)馬鹿な！ そんなことが許されるものか。

守門者一。(冷笑して)蟲のいゝことを言ふにも程がある。大臣宰相でさへ一歩もこの門内へ足を踏み込むことは許されぬのだ！

蓮華色。(曇時沈吟して後、哀願するやうに)それではどうぞお慈悲を持ちまして、たつた一言わたしのお見舞の言葉を王様にお取次ぎ下さることは出来ますまいか。

守門者二。(五月蠅さうに)ならんと言ふに！

蓮華色。(悲しげに)あゝ是非もございません。(はらくと涕を滴して)あゝ、あなた方がどん

なにわたしが頻婆娑羅王様を尊敬しお慕ひ申してゐるかを知つて下されたら――

守門者二。(怒つて)餘計なことをくどく申さずに去れ！

守門者一。愚圖々々してゐるとお前の爲にはなるまいぜ。

守門者三。(堪え兼ねて制する。)まあ、そんなに没義道むぎどうに言ふものでもないさ。(蓮華色に向ひ)

あなたの切なる心は何時かは老王様に通ずることもあるでせう。したが、あなたは一體誰れです。

守門者二、舌打する。守門者一、又かといふやうに苦々しげに守門者三を尻眼にかけて睨む。

蓮華色。(守門者三に感謝の意を表して)わたしは華華色れんげしきと申す貧しい比丘尼でございます。

守門者三、四、鳥渡顔を見合はす。娑羅跋提憐しらかだてりいたやうに蓮華色の横顔をちつと見詰める。

守門者一。(忽ちひどく不快氣に眉を擡めて、無遠慮な投げるやうな調子で)お前だな。沙門の目連を誘惑しやうとして却つてあいつの魔法にかゝつて釋迦の弟子になつたのは！ ふむ、なる程お前は美人だな。

蓮華色。(肩を揚げてチラリと守門者一を見て何か言はうとして強き自制を以て止める。總て忍辱の勝利に濡れた眼をちつと門内の鐵の扉に注いで、悲しく) おゝ頻婆娑羅王様! 懐しい頻婆娑羅王様!

(込み上げて来る悲しみの爲にふつと言葉がとぎれる。) おゝわたしは最早あの蒼空のやうに澄み渡つたあなたの優しいお眼を拜することが出来ぬのでございますか。温かいあなたのお言葉を承ることが出来ぬのでございますか。おゝこの恐しい七重の鐵の扉があなたとあなたを慈父のやうにお慕ひ申してゐる凡ての人民とを永久に割いてしまつたのか! おゝ、それが七十餘年の永い忍苦と精進によつてこの摩竭陀の大王國を建設遊ばされた大王の御運の果であらうとは! (はらくと熱涙を流して) おゝ頻婆娑羅王様! あゝ天輪聖王のやうに民衆から仰がれてお出でなされたあなたでさへ宿業の綱を断ち切るとは出来ぬさらないのでございますか。あゝ三界は窈々冥々として流轉無常の巷でございます。やがては無邊に輝き渡る大涅槃の世界があなたに惠まるゝでございます。おゝその不滅の都で……尊い無量光明の世界にて……再

びあなたにお目にかゝる時を、わたしは、わたしは、お待ち申してをります。

(合掌する。やゝしばらく。やがて守門者等に静かに一揖して左上手に去らんとする。)

娑羅跋提。(追ひすがつて) おゝ、あなたは有名な蓮華色様! わたしをお救ひ下さいまし、

この罪深きわたしを――

蓮華色。(顧みて、静かに) あなたはどなたです。

娑羅跋提。わたしは娑羅跋提――あの遊女の娑羅跋提のなれの果でございます。

守門者一。(思はず) ふん―― (皮肉な眼をしてじろくくと娑羅跋提を見る。)

蓮華色。(愕いて) 遊女の娑羅跋提? ほう、その昔王舎城下の若い貴公子達の胸の血を

湧かしたといふ噂の高い全盛の娑羅跋提はあなたでござんしたか。(沁々と我身に引きあ

つてた同悲の眼を以て娑羅跋提を見る。)

娑羅跋提。(思はず強き牽引を感じて地面に跪き、蓮華色にとりすがりて) おゝ蓮華色様! わたしの魂の密かに覚めてゐた方はあなたです。あなたです。あなたです。おゝ永年の惱まし

い放浪の月日のうちにあなたのやうな温かい眼を以てわたしを見て下さる方に始めて逢ひました。わたしは先刻あなたのお顔を見た時に何となく不思議な喜びを感じました。あなたから話しかけられた時に思はずわたしの胸は躍りました。お、この遠くの昔に感激の潮の涸れてしまふわたしの胸が！(泪ぐんで)あ、あなたはわたしに恵まれた尊い善知識に相違ありません。(はらくと涙をこぼす。)

蓮華色。(娑羅跋提の手をとり、考へ深い眼をして沁々と)あ、あなたも矢張り人知れず長い涙の谷を通つて来た方ですね。さあ、一緒にあちらへ参りませう。温かい教法の光があなたに恵まれねばなりません。

娑羅跋提。有難うございます。有難うございます。(蓮華色に随ふて左上手の樹間に退場する。)

守門者一。(二人を見送つて高く笑ひ出す。)ははははは。(守門者二の肩を叩いて)あ、どうだ。

かうして立つてゐると色んな皮肉な藝當を見せつけられるね。(笑ひこけて)あつはつは、あれが遊女の娑羅跋提だとさ。あれが頻婆娑羅王様の弟御の無畏王子と戀をし

て耆婆大臣を生んで塵塚に棄て、若い男と駈落したといふ頗る御鄭重な時代付きの代物なんだ。道理であれは先刻始めてあのお婆あさんを見た時に眉のあたりが餘りに耆婆大臣に似てゐるのでは、つと思つた位だつた。無畏王子が生きてをられたら定めて遺憾無量といふ所なんだがな。はつはつは。

守門者二。こいつは面白い！棄てられた子が今この摩竭陀の王國に時めき給ふ大宰相で、母親は行雲流水を追ふて諸國の靈社靈場をめぐつてお祈りをして歩く巡禮か。どうやら昔の物語にでもありさうな話ぢやないか。(調子をつけて)どうぞ早く二人の者をめぐり逢はしてやりたいものぢやなあ。はつは。

守門者三。(眉を擡める。)

守門者一。(皮肉な調子で)心配は御無用だ。どうせあのお婆あさんは蓮華色の「御濟度」によつて比丘尼の教團にはいりませなあ。さうすれば否でも應でもあの有難屋の耆婆大臣と親子名乗りの一幕が始まるといふ段取りになつて來やうといふものさ。

守門者二。なる程。その時代めいたお芝居の幕を引く役割をあの蓮華色が勤めるつて譯だね。こいつは本當にいゝはまり役だ。(考へて)所であの蓮華色ではないかね、自分の可愛い、亭主を母親に寝取られて自棄になつて男といふ男を荒して歩いたといふ評判の高い莫連者は？

守門者一。あれさ。あれさ。随分と方々をほうつき廻つて男を喰ふて歩いたといふことだ。何しろあの縹緞だから到る所撫で斬りさ。——それがどうだ。何時の間にか立派な比丘尼になりすまして聖者のやうにお説法をして歩くんだからな。

守門者二。何のことはない。釋迦の教團なんて體裁のいゝ人間の掃き溜めだな。はつはつは。

守門者四。叱つ！

阿闍世の侍臣の一人、左上手より急ぎ登場。

侍臣。(上手に立ち降りて)大王のお成りい！

守門者一、二、ぎよつとして姿勢を改める。つい一瞬間の前とは全く別人のやうな、木彫の面のやうな固い表情をしてちつと眼を据えてゐる。上手の樹間より警邏の士卒一、二、三、四、五の五人出て來り守門者四の側に並び立つ。一同肅然として大王を待つ。間もなく侍臣四五名を従へて阿闍世上手より登場。或る内心の焦燥と逡巡との交錯を語る暗い顔。黄金造りの剣を佩き王冠を戴く。一同恭しく敬禮する。

阿闍世。(守門者等を見渡して)何れも日々の殿しい勤め、太儀ぢやな。

守門者四。(一同を代表して)恐れ入りましてございます。

阿闍世。(霎時ちつと門内に見入る。幽かに顫えを帯びた聲で)其後わが父上の御左右はどうぢや。

守門者四。(何か答へんとして躊躇ふ。)

守門者一。(誰れも答へざるを見て、忝しく、しかしどこかにわざとらしい調子を響かせて)頻婆娑羅王様には至極御機嫌麗しくお過し遊ばされます。

阿闍世。(訝かしげに)御機嫌うるはしく？ ふむ……………。

間。息だわしき沈黙。

阿闍世。(急に固き聲になり)もう是れ父上をこの七重の室内に幽閉してから二十日に餘る

管ぢや。(忽ち或る閃きが顔を通ぐ。強き調子で)何者か密かに獄中に忍び込んで父上を助けるものがあるのではないか。どうぢや!

守門者三、四きくつとして顔を見合はす。

守門者一。畏れながら逐一ありの儘を申し上げます。(守門者四はらくして眼顔で止めやうとする。それには氣づかぬやうすにでずん／＼續ける。)實は頻婆娑羅王様御監禁の翌日より大夫だいふ人韋提希様が時々密かに御見舞に成らせられるのでございます。どうやらお身體を淨めて妙蜜を塗り、お胸に飾られた瓔珞の中に蒲桃ぼたうの漿じょうなどを盛つてこつそりと獄中の老王様におすゝめ遊ばされる模様でございます。何に致せ、外ならぬ大夫人様のことにございますれば、強つてお止め申すことも出来兼ねまするやうな譯にて、一同まことに迷惑いたしてをる次第でございます。

阿闍世。(赫怒して)何、母上が? 不、不都合千萬ぢや! (怒りの爲に身を震はして)汝等は全體誰れの許しを受けて大夫人を獄中に通したのだ!

問。恐しき沈黙。

守門者三。(決心の色を現して)畏れながら申し上げます。始めわたくし共がこの牢獄警護の重任を蒙りました時に「諸の群臣を制せよ」との勅諭を拜しましてございます。それ故に、臣下の者ならば假令大臣宰相たりとも一步もこの門内に足を踏み込ましたり致したことはございませぬ。けれども畏れ多きことながらやんごとなき方々に關しましては何事もはつきりとした御沙汰を蒙つては……………。

阿闍世。(斷ち切るやうに遮つて)だから大夫人をこの牢獄へ通してもいゝといふのか!

愚か者ッ! それが汝等の犯したこの重大な過失の言譯になると思ふのか! (屹と守門者三を睨む。)

守門者三。御言葉をお返し申すやうにて洵に畏れ多い次第ではございますが、態と勅諭を曲解して恣あまな處置に及んだ譯では決してございませぬ。たゞ、わたくし共はあの尊い御身分をも打ち忘れ、われら風情の低い者に對して尊い玉の冠を傾けて、

涙ながらにお頼み遊ばされる大夫人様のお痛はしいお姿を拜みましては、どうしても無下に拒絶することが出来なかつたのでございます。なれども、縦令王族と雖も絶対に禁制せよとの明白な御説を拜してをりましたならば、大夫人様がどのやうに歎願遊ばされてもわたくし共は自分の立場をしつかりと守つたこととでございます。

阿闍世。(投げつけるやうに) たわけ者ッ！ 汝はどこまでも言を左右に托して自分の責任を脱れやうとするのか！

守門者三。(恭しく、しかし、はつきりと) 畏れながらわたくしは自分が何を爲したか、又何を爲さねばならぬかといふことはよく存じてをります。わたくしは決して自分の責任を避けやうとする醜い心は持つてをりませぬ。たゞわたくしは……。

阿闍世。(厳しく遮つて) 控へろ、愚か者！ 汝は誰れの前に立つてゐるのぢや。汝が言葉盡して試みる一語一語の辯解は徒らに汝の背に一つ一つの重い罪を負はせるに過

ぎぬことを知らぬのか！ (忿怒の爲に剣を握りしめて身を震はす。)

守門者一、烈しい不安と恐怖とを制して阿闍世の様子を窺ふてゐる。守門者三涙ぐんで阿闍世の足元に眼を落してゐたが、再び何か言ひ出さうとする。

守門者四。(守門者三を遮つて、取りなすやうに恐るゝ) 大王様！ (守門者三を見やりて) 御覽の通

りにこの男はわたくし共同僚の中でいちばんの年少者でございます、又いちばん素直な善良な心の持主でございます。(守門者一の顔に突然激しき反感の色動く。) その善良な温かい心が到頭わたくし共一同を動かして大王の大御心に添ひたてまつることの出来ぬやうな重大な過失を犯さしめたのでございます。畏れながらよろしく御推察下されますやうにお願ひ申し上げます。

阿闍世。(押し黙つて守門者三を睨んでゐる。)

守門者一。(ちつと阿闍世の眼色を窺ふてゐたが漸く安心する。と同時に急に狡猾な微笑が唇を洩れやうとする。それを巧みに覆ひかくして) いや、大王様！ あの男は年こそ若うございするが、わ

たくし共の仲間の中では一番優れた智慧者でございます。たゞ時折には自分の智慧に負けてしまつて却つて物の輕重大小を見失ふやうなことが無いでもないのが難と言へば難ではございますが。はい、只今も同僚が申し上げました通りに根が正直ない、人間でございますから、決して好んで大王様に言葉を返すやうな惡るい人間ではないのでございますから、何卒此度の所だけは宥し下されますやうに——（半は獨白の如く）尤もあの智慧者の賢い分別が、ちつとは釋迦の弟子共のいたづらを防ぐ役にでも立つてくれると助かるのだが。

守門者四、眉を擡める。守門者三ちつと眼を据えて空を見詰めてゐる。

阿闍世。（閉き尤める。）何！ 釋迦の弟子が何と致した？（ビリ／＼と神經的に眉を動かす。）

守門者一。（踏ふやうな風で）いや何……。沙門の目連のことでございますが。あの男にはわたくし共も本當に困り切つてゐるのでございます。……………

阿闍世。（目連と聞くと急に恐しく昂奮して）何！ 目連？ 目連がどうしたのだ！

守門者一。（仕方がないといった風で）はい。あの目連が日々何處からともなく獄中に忍び込んで老王様に八戒を授けてゐるのでございます。

阿闍世。（火のやうに憤つて）な、何といふことだ！

守門者二。その上、沙門の富樓那までが時々忍び込んで老王様に説法をするのでございませう。

阿闍世。（吼えるやうに）あゝ、あの猪口才の富樓那までが——全體あいつ等はこの譬固の殿しい中をどうして忍び込むのぢや！ その爲に多くの士卒を汝等に遣はしてあるではないか！

守門者一。それがでございます、大王様。それがどうも不思議でございます。何處から這入るのかさつぱり分らないのでございます。……………

守門者二。どうもあの獄中の高い石の窓から忍び込むやうに思はれます。昨日の夕方にも士卒の一人がわたくしに申しますには、何でも沙門の目連があゝの黄色い衣

の裾を翻して俵のやうに空中を飛んでこの牢獄の中へ這入つたのを見たとか……
阿闍世。空中を飛んで？（呻くやうに）むう。不、不埒千萬な——

この時、右奥の樹間より士卒六、七の二人槍を手にして息を切つて急ぎ登場する。阿闍世を見て愕き立ち降り敬禮する。阿闍世屹と眼を据えて士卒六、七を見る。

士卒六。畏れながら大王様に申し上げます。只今わたくし共四五名の者共がこの牢獄の後の森のあたりを巡邏いたしてをりますると、不意にあの幾丈とも知れぬ高い石垣の上から飛鳥の如くひらりと飛び下りたものを見掛けましてございます。わたくし共は愕いてその曲者を取り抑えやうといたしましたが、曲者は素早くわたくしの槍の下をかいくぐつてあの薄暗い森の繁みの中へ吸はれるやうに姿を隠しましてでございます。（残念さうに）そ、そいつがどうやらあの釋迦の弟子の富樓那らしい様子でございます。

士卒七。（旁白。）さうだ。ち、畜生ッ！ あいつは富樓那に違ひない。おれはちやんと

この二つの眼で見たのだ。おれはあの男の顔に見覚えがある。

阿闍世の怒り絶頂に達して言葉も出ない。間。凄愴なる沈黙。この時蓮華色暗い沈んだ眼を据えて再び左手より出でんとして、この物々しき光景を見てはつとして樹陰にかくれる。異常な緊張を以て耳を聳てる。

守門者一。（阿闍世の眼の色を窺ひつゝ）大王様！（何かつゞけて言はんとしてやめる。短き間、媚びるやうに）いやはや、あの魔法使ひ共は何をするやら分つたものではございませぬ。

唯遺憾に思ひますのは畏れながら頻婆娑羅王様が何時までもあの魔法師共に騙されてさも御満足げにあいつ等の説法を聴聞遊ばされることでございます。さうして説法がすんであいつ等が何處へともなく姿を消してしまひますと、老王様は静かに窓の所へお寄りなされて、遙かにあの耆闍崛山の滴るやうな樹々の緑の空を仰いで静かに合掌してお出で遊ばされるのでございます。その御様子はまるで身獄中にあることをも忘れてお出でなされるやうでございます。御顔の色もつや／＼と打ち和いで法悦に浸つてお出で遊ばされるやうに拜せられるのでございます。

阿闍世。(突然蛇のやうに恐しい憎惡の眼を光らして)あゝ何といふ無自覺な老人だ! 何處までもいかさまものゝ釋迦の弟子などにすがりついて自らの惡業を胡麻化さうとするのか! 呪はれてあれ、この惡王! (短き間。忽ち顔きて)さうぢや。(士卒の二、二に向ひ)汝等は早く往つて汝等の持つてゐるその槍をもつてこの惡王の蹠を削れ! その蹠があの釋迦などの居る耆闍崛山の見える窓の下までこの惡王を運ぶのだ!

人々顔を見合して戰慄する。蓮華色危く卒倒せんとして辛じて樹木にとりすがりて自分を支へる。

士卒一。(甚しき恐怖に震えつゝ)えつ! 老王様の、お、おみ足の裏を……。

士卒二。(殆ど同時に)あゝ! どうしてそんな恐しいことが——(哀願するやうに阿闍世の顔を見上げる。)

阿闍世。(惡魔のやうに笑ふ。)あつはつはつは、意氣地無し奴! だが、足の裏を削られても尙窓の下へにがり寄るかも知れないわ。うむ、さうだ。鐵鎖を以て兩足を獄中の石の柱に繋いだがい!

士卒一。(士卒二と顔を見合して)あの、鐵の鎖を以て……。

士卒二。老王様のおみ足を繋ぐのでございますか。

阿闍世。さうぢや! (鳥渡考へて)それから獄内の窓といふ窓は悉く嚴重に閉ぢて置

け! 無自覺な惡王に太陽の光が惠まれるといふことは應はしくないことぢや。

士卒一、二。(同時に)はつ。(再び顔を見合して踏ふ。)

阿闍世。(苛立つて)早くせい!

侍臣の一人。(殆ど同時に士卒の二を屹と見て)大王様の御意ですぞ!

士卒一、二。(同時に)はつ!

士卒一、二、急ぎ小腰をかどめて阿闍世の前を通りて門内に入る。恐しい音を立て、鐵の扉が開かれ、いぢけたやうな冷たい薄くらがりの中へ士卒一、二の姿が吸ひ込まれる。そのくらがりの中から再び鐵の扉を開くもの凄い響が吐き出される。

阿闍世。(士卒一、二の後姿を忌々しげに見送つて投げつけるやうに) 惡王! 惡王! 惡王! (波)

のやうに押しよせて来る激しき忿怒と憎惡とに打ち勝たれて、あゝこの惡王を助けんとする我母は賊だ！宥すべからざる賊だ！王者の意志に逆ふて密かに惡王に通ずる賊は最も重き罪科に處せられねばならぬ。(此時蓮華色深く決する所あるが如く傾きて急ぎ上手に退場する。)沙門は惡人だ！幻惑げんまぐの呪術を以てこの惡王を迷はすのだ！(激越して)者共！目連と富樓那は見つけ次第にぶち斬つてしまへ！目連と富樓那の生白い素ツ首に重い賞を懸けたぞ！

一同。はつ！

阿闍世侍臣等に目くばせして去らんとする。一同敬禮する。守門者三、何物か不可抗の力に押し出されるやうに一歩前に出て呼びとめる。

守門者三。(眞者になり唇を顫して)大王様！畏れながら姑くお待ち下されまするやうに。

阿闍世。(顧みて性急に)何事ぢや。

守門者三。(吃るやうに)大王様には急いで、ど、どちらへ成らせられまする。

阿闍世。餘計なことを訊く奴ぢや。急ぎ歸つてわしの母に成敗を加へるのだ！

守門者三。(跪きて)畏れながら……その儀は……お止とどまり遊ばされまするやうにお願ひ申し上げます。

阿闍世。(眼が光る。)何と申す！

守門者三。(確かりして調子になり)大夫人韋提希様をこの牢屋の中へお通し申した第一の責任者はわたくしでございます。……………

阿闍世。(押し黙つて守門者三を睨む。)

守門者四。(はらくして小聲で旁白。)あゝ、恐しいことにならねばいゝが——

守門者三。(次第に熱して)それで、畏れながらもし大夫人様の御所業に罪があまりなされると言ふならば、それは御通行を許可することを第一に主張したこのわたくしの罪でございます。わたくしに罪があるのでございます！あゝ大王様！わたくしはどのやうな殿しい御成敗をも慎んで受けます。たゞ大夫人様を罪することだ

けはお思ひ止つて下されませうにお願い申し上げます。

阿闍世。(一喝する)馬鹿者ツ！ 貴様如き者を一人や二人を成敗してこのわしの憤りが鎮まると思ふかツ！ (搦けんばかりに劍を握つて身を顛はす。)

守門者三。(はらくと熱涙を流して空を仰いで)お、諸天も御照覽あれ！ 大王を思ふこの低き者の切なる心を――

阿闍世。(耳にも容れずに)お、このわしの尿管を聲高く渦巻き流れる復讐の潮をどうするのだ！ (守門者三を尻目に睨みつけて)ふう、貴様のやうな……。たわけ者奴！ (荒々しく上手に去らんとする。)

守門者三。(狂氣の如く追ひすがつて)大王！ (阿闍世の前に身を投げて無限の哀願を籠めて見上げる。)

阿闍世。無禮者ツ！ (劍を抜いて守門者三を斬る。)

守門者三。(叫ぶ)お、諸天よ！ 大王の魂を護らせたまへ―― (死す。)

阿闍世。命冥加の無い奴ぢや。は、は、は、は。(悽愴なる哄笑)

一同の視線が様々の感情の動きと交錯とを語りつゝ守門者三の死骸に集る。――急に幕下る。

第二場

王舎城内の後宮の一室。

正面や、左によりて横に長き窓。窓外には大きな芭蕉の葉が風に搖ぎ、その遙かの向ふに宮殿の一部が光琳の畫のやうに見える。窓の下には横に長き華麗なる榻が置かれてある。左側上手寄に次の室に通ずる口があり、葉裏色の帷が懸つてゐる。帷は半分程開かれてゐる。右側上手及び左側下手に扉がある。

第一場と同じ、殆ど同時刻。

大夫人韋提希、窓の下の榻に掛け、左の肘を窓に靠せ、眼を閉ぢてうつむきをる。四十七八歳の品のいゝ婦人。頭には冠を戴き胸には瓔珞をかけてゐる。

右側上手の扉を開いて侍女舍脂靜かに登場。二十二三歳の可愛らしき顔を持った女。

舍脂。(扉の近くに立ち、靜かに)大夫人様――

韋提希。(答へず。)

舍脂。大夫人様。

韋提希。(答へず。)

舍脂。(霎時ちつと悲しさうに韋提希を見詰めて) まあ—— (考へる。やがて一二歩近づきやゝ聲高に) 大夫人様!

韋提希。(驚いたやうに頭を掻けて) あゝ、お前は舍脂か。(淋しく微笑んで) わたしとしたことが。ついうたゝ寝をしたさうな。

舍脂。御免下さいまし。餘りにお静かであらつしやるものでございますから、ひよつとしたらお睡つてお出で遊ばされるのではないかと思ひましてお伺ひいたしますと、やつぱりさうでございました。何しろ此頃の不順の氣候でございますから、それに(窓の外を見て) かうして濕つぽい風が絶えず吹いてお庭の芭蕉の葉が波のやうにゆら／＼と動いてをります。お風邪でも召しましてはと存じまして—— お宥し下さいまし。

韋提希。いや、起してくれてよかつたの。でないとは何處までわたしの苦しい夢が續い

たか知れないのぢや。わたしはもう少しで泣き出す所であつた。(溜息をする)

舍脂。まあ、お苦し、夢を……。

韋提希。何でも頻婆娑羅王様と御一緒に釋迦如來様の御許へ御法縁に會ひにまゐつたのぢや。所が王様は隨喜の涙に咽んで世尊の御説法を聽聞してお出で遊ばされるのに、その尊いお話がわたしにはさつぱり分らぬのぢや。どんなに耳を澄して聽聞しても少しも領解りょうげが出来ぬのぢや。わたしは本當に情なくなつて「世尊の尊いお言葉がどうしてわたしの耳にはいらぬのでございませう」とお訊きすると、世尊は「あなたは餘りに罪障が重いから。それに苦勞が足りませんね。」さういふ風に軽い調子で仰せられながら憐れむやうに姑くわたしの顔を見詰めてお出で遊ばされたが、それから黙つてすつと彼方へ行かうとせられるのぢや。「あゝ、それは餘りと申すものでございます。こんなに苦しい毎日を過してゐるわたしでございすのに——」と掻き口説きつゝわたしは世尊の御衣の裾に取り縋らうとすると、お前に呼び醒まされ

て眼がさめたのぢや。

舍脂。(ちつと韋提希を見詰めて悲しさに) まあ。

韋提希。

(霎時ちつと夢の跡を追ふやうに空を見詰める。聽て深き溜息を洩らして、半ば獨白のやうに) あ

い、この夢がどうやらわたしといふものゝ本當の相を語つてゐるやうな氣がする。

あゝ、こんなにも堪え難い恐しい運命の鞭をちつと忍んでゐるわたしが、まだ苦勞が足りない世尊から叱りを蒙る所を見ると、わたしはよく／＼下根の愚か者に生れついたのであらう。わたしはどうしても救はれぬ業を持つてゐるのであらう。……

舍脂。(遮るやうに) どうしてそのやうなことが。大夫人様!

韋提希。いや、舍脂。わたしは此頃人間の力ではどうすることも出来ぬ業といふものを沁々と感ぜずにはをられぬのぢや。(ちつと眼を据えて) わたしはこの頃眞夜中頃などによく身の毛もよだつやうな恐しい幻を見ることがある。——恐しく大きな宿業の重い車が轟々とももの凄しい地響きを打つて鳴り渡りつゝ無邊の遠い彼方から慕直に

わたしを目がけて近づいて來るのぢや。わたしはその重い車の轍に敷かれて無残に押し潰されるのを待ちながらぶる／＼慄えつゝ刻々にわたしに迫つて來るその凄まじい響きに耳を澄してゐる。はつとして息の窒るやうな恐しい瞬間が來る! その刹那に恐しく大きい眞黒いものが稻妻のやうにわたしとすれ／＼にわたしの側を疾驅して遙かのうしろへ飛んで行く! わたしは夕立の雲のうしろへ消えてゆく雷の音のやうに次第々に遠ざかる車の轍の音に耳を傾けつゝ、ほつとして胸を撫でおろす。それと同時に矢ッ張り一と思ひに押し潰された方がよかつたといふやうな氣もするのだが——

舍脂。(青ざめて顔えながら) まあ、恐しいことを仰せられます。

右の扉の外に人の氣勢がする。舍脂少し慌てゝ右下手に退き立つ。一人の侍女急ぎ登場。

侍女。(扉の近くに立つて一禮して) 大夫人様。蓮華色様が拜謁を乞はれます。大變に急いでお出でなされる模様でございます。

韋提希。(急に別人のやうに喜びに輝いて)何! 蓮華色? 直ぐにお通し申せ。
侍女。畏りました。(一禮して退場。)

舍脂直覺的に何となく不安さうに何物かを待ちもうけるやうな緊張した眼をして、ちつと右上手の扉を見詰める。蓮華色慌しく登場。

蓮華色。(喘ぎながら) 大夫人様! (危く前にのめり倒れんとして辛じて身を支へる。)

韋提希。(立ち上つて) あゝ蓮華色! そなたは永い難澁な旅路からよく無事で戻りました。色々承りたいこともある。聞いて貰はねばならぬこともある。まあ、ようこそ訪ねてくれた。あゝ、何から語つていいやら……。(泪ぐんでふらくと近づかうとする。)

蓮華色。(手を揚げて遮つて) 大夫人様! (せき込んで) それどころではございません。あなたの御身が危ないので! 早くこゝをお逃げ下さいませ。早く!

韋提希。(一瞬時にして事象を察する。顔色さつと變はる。) 阿闍世が! あゝ! (よろめく。)
舍脂何物かに衝き飛ばされたやうに、よろめき倒れんとして、辛じて自ら支へる。ちつと息をこらして蓮華色を見る。

蓮華色。さうです。大王は今火のやうに激怒して頻婆娑羅王様に内通せられたあなた
の罪を問はねばならぬと言つて急いでこちらへ戻られる途中でございます。大夫人
様! 早くお逃げ下さいませ、早く! 兎に角一旦こゝをお逃げになりますれば……。
韋提希。(沈痛なる調子にて旁白。) あゝわたしの時が来た! 業の地車がわたしの苦みを救
ふてくれる時が来たのぢや。——蓮華色! わたしはちつとして阿闍世の成敗を受
けませう。

蓮華色。(屹として口早に) な、何を仰在るのです、大夫人様——(熱意を籠めて) あなたは阿
闍世大王をお愛しなさらないのでございますか。あゝ、あなたはあの恐しい七重の
鐵の扉の中に閉ぢ込められてありとあらゆる苦患の數々を忍受しつゝ、靜かに阿闍
世大王の魂の行衛に熱い憶念のまことを捧げてお出で遊ばされる頻婆娑羅王様の御
心を感じることがお出来にならないのでございますか。あゝ大夫人様! 大王の焼
き爛れてゐる魂をお救ひ申す爲にあなたは最後の刹那までも本當に自重して下さ

らねばなりませんぞ！ さ、早くお逃げ下さい。早くお逃げ下さい。（おろくする舎脂に向ひ）あなた、しつかりして下さいよ！ さあ、早く早く大夫人様のお伴をして……。（退場しつゝ）わたしは大夫人様を護る爲に耆婆大臣を呼びに参らねば……。

舎脂。（蓮華色の姿が扉の外にかくれると俄に屹となつて韋提希に近づきて）大夫人様！ 早くお逃げ遊ばして！ わたくしがお伴をいたします。（手を執る。）

韋提希。（舎脂の手をふり放つて）逃げる？ おゝ何處へ、何處へ逃げるのか！（次第に言葉に異様な調子を帯びる。）阿闍世の忿りから脱れても業の地車を脱れることは出来ぬのぢや。今度といふ今度こそは脱れることは出来ぬのぢや

舎脂。（韋提希にとりすがりはらくと涙を流して）おゝ、大夫人様！ 後生ですから早くお逃げなされて……早く……早く……

韋提希。（ふつと閉耳を立てる。眼を異様に光らして）おゝ。業の地車の轍の音がもの凄く鳴り響いて来る。舎脂！ お前には聞えぬか。あれ、あの様に——（戦慄する。）

舎脂。あゝ大夫人様！ 大夫人様！ （しつかりと韋提希の手を執つて）早く逃げて。早く！ 早く！

左の扉の外に俄にもものさわがしき音がする。

舎脂。（絶望的に）あゝ！ （韋提希の手を放つて顔を覆ふ。）

左下手の扉を弾くやうに開いて烈火の如く憤怒せる阿闍世登場する。つゞいて侍臣四五人登場。それと前後して右上手の扉より武装せる士卒五六人登場。雙方より眼を見かわして何事かをしめし合ふ。

阿闍世。（屹ともの凄く韋提希を睨みつけて）母上！

韋提希。（亂れて）阿闍世！ そ、そなたはこの母を殺す氣か！

阿闍世。（息をけづまして押し出すやうに）さうです！ 二十年來わしの魂を荒してゐた復讐の血潮は最早あなたの存在を許さなくなつたのだ！ 母上、覺悟なさい！（劍を抜く。）

韋提希。（眞蒼になり唇を痙攣させて）ふ、不孝者ッ！ （窮鼠の如く身がまへする。）

舎脂。（阿闍世の前に身を投げて哀願の眼を揚げて）大王様！ 大王様！ どうぞ、どうぞ、姑

くお待ち遊ばして——

阿闍世。え、ッ。この命知らずのたわけ者奴が！

舍脂。(必死になつて) あゝ大王様！ 大王様！ 早まつて下されますな。と、とりかへしのつかぬ一大事が……

阿闍世。(激しく) 退け！ 馬鹿者ッ！

阿闍世ぢり／＼と韋提希に近づかんとする。舍脂狂氣の如くに起き上つて阿闍世と韋提希との間へ割つて入り韋提希をかばふ。韋提希舍脂の後にかくれるやうにして次第に左側に近よる。阿闍世と韋提希とは舍脂を中心として徐々に回轉する。阿闍世苛立つて劍を突き出す。舍脂の左腕を創く。舍脂「あつー」と叫んでよるめく。阿闍世踏み込んで韋提希を刺さんとする。その刹那に「し、しばらく」と叫んで大臣月光左の扉より磔の如く入る。五十餘歳の瘠せぎすな精嚴なる風手。牙え切つた智慧そのものゝやうな眼。劍を帯ぶ。一同色めく。

月光。(屹と阿闍世を見据えて) 大王！

阿闍世。(愕然として) 月光か—— (たち／＼と二三歩退く。)

月光 大王！ この奇怪な光景は一體何事でございますか？

阿闍世。(氣勢を恢復する。月光を鋭く睨んで) そ、そちの知つたことぢやない！ 退れ！

月光。いゝや、退りませぬ！ 由緒たゞしき王舎大城のこの尊い後宮が何故に忌はしき残害殺戮の血潮に染められねばなりませんか。理由を承るまでは一步も退がることはなりません！

阿闍世。ぶ、無禮者ッ！

阿闍世眼をいからして一步月光に近づく。月光巖角に生じた孤松の如くすつくりと立つたまゝ動せず。ちつと阿闍世を凝視する。

間。凄愴なる沈黙。

耆婆大臣慌しく登場。四十二三歳のやゝ肥り肉の重厚なる風采。劍を帯ぶ。

耆婆。(息をはづまして) 大王！

阿闍世。あゝ、耆婆か。(再び強く氣勢を挫かる)

耆婆。(涙ぐんで旁白。) あゝ、わしは何といふ恐しい人間の相を見ねばならないのか——

(阿闍世に向ひ肅然として) 大王！ 今更申し上げるまでもなく、抑々重大なる國家の樞機

に關しては少くともこの月光と耆婆とに御諮詢下さればならぬ筈でございます。それに大王はわたくしが頻婆娑羅王様の御説を蒙つて耆闍崛山に參つてゐる中に、突然にも御父君を召し捕へて極惡の囚人のやうにあの陰慘たる七重の牢獄の中に押し込められました。わたくしがその大事變を承つた時はもうどうすることも出来ぬ勢に陥つてをりました。わたしは只管に恐懼して門を閉ぢて謹慎しつゝ、大王の御心の和らぎを待つて御意見申し上げやうと決心したのでございます。それに何ぞや、大王は重ねて御母君を害したてまつらうとせられるのか！ おゝそれが王者の御所業と申されませうか。あゝ。あなたは惡魔に魅入れなされたのか！

阿闍世。(鋭く)耆婆！ よく聞け！ わしには父といふものはないのだぞ。汝等がわが父と呼ぶ所のものは父といふ尊い假面の下に二十年來わしの魂を虐げて來た仇に過ぎないのだ！ いや寧ろわしの生れながらの仇であるのだ！ (憤激のあまりに身を震はして)耆婆！ わしは今わしの生れながらの仇を助けやうとした逆徒に對して、それ

に應はしい成敗を加へやうとするのだ！ (猛然として再び韋提希に肉薄せんとする。)

耆婆。(突然つか／＼と韋提希に近づき韋提希を背にして阿闍世に向つて立ち、劍を抜き放ちて空を睨んで叫ぶ。)

あゝ惡魔よ！ 去れ！ 摩竭陀の大臣耆婆が汝の黝い手から大王と大夫人の尊い魂を護る爲にこゝに控へてをるのだぞ！

人々愕く。阿闍世さすがにたぢろく。

阿闍世。(突然決する所ある如く、鋭く耆婆を睨みつけて)退がれ、慮外者！ (ちり／＼と耆婆に近づかんとする。)

月光。(聲を勵して)お待ち下さい、大王！ 一言最後に申し上げねばならぬことがある。

阿闍世。(立ち停りて忿怒と憎惡との交錯した眼を以て無言の儘月光を睨む。)

月光。(底力のある聲で)大王！ わたくしは曾て或る婆羅門の行者から毗陀論ピダロンの説を承つたことがあります。その説に依りまするに、劫初よりこのかた一國の太子の身で

ありながら國王の位を奪ひ取らんが爲に自らの父君を弑した儕が一萬八千人もあるといふこととございます。なれども、苟くも王者の尊を以て自らの母胎に虐殺の刃を翳すやうな無道の所爲は如何なる粟散の邊土にも聞いたためしはございませぬ。然るに今この摩竭陀の大王國に君臨せらるゝ大王が敢て御母君大夫人を逆害しやうとなされるとは！ これ梅陀羅の所業である！ これ刹帝利の尊い種族を汚すものである！ 大王！ わたくし共はどうして汚されゆく王室の行衛を黙視するに忍びませうや。(鋭く阿闍世を見詰めて) 萬一大王にしてどうしてもわたくし共の諫言をお用なき時には、わたくし共は覺悟を致さねばなりません。時宜によりては畏れながら大王をわれ等の主君として戴くことが出来ぬやうにならうも知れませぬ！ 大王、もしわれ等兩人が死を以て大王の暴逆を糺彈するならば、恐らく國論が鼎の如くに沸騰して、如何に大王のお力を以ても鎮めることが出来になるまいかと存じます。

阿闍世。(眞蒼になり、呻くやうに) あゝ、

月光。大王の御決心を承りたう存じます！

耆婆。(バチリと劍を歛めて) 大王！ 何卒思ひ止まつて下されますやうに！

阿闍世。(押し黙つて空を睨んでゐる。)

やゝ長き間。凄愴なる沈黙が支配する。

月光。(押し壓されたやうな聲にて) あゝ、是非もございませぬ。大王！ さらばでござります。

月光、阿闍世の不意討にそなへる爲に劍を按じてうしろざまに退く。耆婆も同じく却行して退く。

阿闍世。(訴へるやうに) 耆婆！ そ、そちまでもこのわしを解つてくれぬのか。あゝ——

阿闍世、煩悶と焦燥との爲に激しく身體を震はして、ものすごく空を睨む。

阿闍世。耆婆！ わしは考へ直さねばならぬ。月光！ そちも待つてくれ。(短き間。突然手にせる劍を牀に落す。) わしは母上を害することを思ひ止まつた。

耆婆。(涙ぐんで) あゝ、大王！

月光。(同時に)では、わたくし共の諫言をお用ひ下されますか。

阿闍世。(餘憤を制することが出来ずに)けれども、わしは母上をこの儘にして許して置くことは出来ぬのぢや！ (侍臣等に向ひ激しき調子にて)者共！ 汝等は大夫人を捕えて直ちに深宮じんぐうに幽閉せよ！

侍臣一同。はつ！

阿闍世。嚴重に監禁するのだぞ！ 堅く一步も外へお出し申しては相成らぬぞ！
侍臣一同。はつ！

者婆と月光と顔を見合はす。月光何か言ひ出さんとする。者婆眼顔で強く制する。

侍臣の一人。(つかく)と韋提希に近づき) 大夫人様！ 大王の御命令でございますぞ！
(士卒等に眼くばせする。)

士卒等直ちに近よりて、左右より韋提希を引き立てんとする。

舍脂。(泣きながら韋提希にとり纏る。) おゝ大夫人様！ 大夫人様！

者婆。(よろめくやうに韋提希に近づき跪きて、無言の儘無限の意を籠めて韋提希を見上げる。)

韋提希。(者婆を見下ろし、茫然として流涕して) おゝ者婆！ そなたは——(無限の情に迫られて言葉續かず。)

者婆。(無上の熱意をこめて) おゝ大夫人！ どうぞお忍び下されますやうに！ 忍んで時をお待ち下されますやうに！ 本當に忍ぶといふことがどんなことだか、それをあなたは懸てお知りになるでございませう。

士卒等鄭重に、しかし容赦なく韋提希を取り巻いて引き立てる。阿闍世鋭く眼を光らして韋提希を睨んでゐる。

月光むしろ冷たき眼差しを以て阿闍世を注視する。——幕。

第三場

王舎城内の深宮——韋提希夫人の幽閉せられてゐる座敷牢。

正面奥一面に黒き帷がかゝり、帷の右の端が一間あまり繰り開かれてそこから固い感じのする臥榻が半分ばかり覗いてゐる。右側上手寄及び左側中程に扉があり、何れも固く閉ぢられてゐる。右側下手に高き所に窓があり、鐵の格子が打ちつけられてある。窓より斜陽さして薄暗く室内を照してゐる。窓の下には粗末ながつしりとした坐榻が壁に添ふて置かれてある。窓の下のあたりに懸つてゐる王妃の冠が陰惨たる室内の空氣の中に寒い光を放つてゐる。

第二場より六七日の後、夕暮れ。外には騒がしき風の音。樹木の枝と枝との軋る音、木の葉の落つる音。芭蕉の葉の摺れ合ふ音など時々聞える。

韋提希窓の下の坐榻に突伏してゐる。肩のあたりが時々吐息をするやうに微動する。

長き間。舞臺次第に暗くなる。右上手の扉が音もなく開かれ、侍女二人、一人は燈臺を一人は鍵をもちて登場する。侍女の一人灯臺を黒き帷の前よき所に置き氣味悪るさうに四邊を見回し、やがて憐れむやうな眸子を韋提希に投げて退場せんとする。深宮警固の侍卒一人登場、黙つて手をさしのべて侍女の一人より鍵を受

け取る。侍女等直ちに逃げるやうに退場する。侍卒扉の近くに立ちて眼を鋭く光らしてさぐるやうに室内を隈なく見回す。聽て黙つて頷き退場する。外から鍵をかける音がガチャリと室内の沈んだ空氣に響く。韋提希少し驚いたやうに身を起す。胸にかゝつてゐる瓔珞がすつかり墮たれてゐる衣服と不調和に輝き、その愁愛憔悴せる顔容を一層悽慘に反照してゐる。

韋提希。(深き溜息を洩して) あゝ、又日が暮れたさうな。恐しく長い一日がまた過ぎ去つた。(風の音一しきり戸外を走り過ぐ。灯火しきりに搖めく。洞のやうな眼にてそれをぢつと見詰めて、ゆるく) あゝ、今宵も亦あの黄色い灯火ともしびに悲しく照らされて、あの堅い寐床の上に横はらねばならぬのか——

韋提希靜かに牀の上に立ち上り、よろめくやうに室内を横切つて帷の方に近づく。臥榻の上に登る氣力もないやうに、頰れるやうに牀に膝をつきて臥榻の端に兩手を靠せてうつむく。

長き間。また一しきり強き風の音戸外を走り過ぐ。灯火危く消えんとして室内暗くなる。再び灯火の明るくなつた時に、左の扉の前に沙門の目連がすつくりと立つてゐる。清嚴なる風半。強き意志と深き智慧とを顯る澄んだ眼。四十六七歳。

目連。(室内を見回す。低い、しかし力の籠つた聲にて) 大夫人——

章提希。(頭を掻け開耳を立てる。再びうつむく。)

目連。(稍々聲を高めて) 大夫人!

章提希。(再び頭を起して) 矢ッ張り誰れかどわたしを呼ぶやうぢや。(立ち上りあたりを見回す。人影を見付けて愕く。霎時疑ひと怖れの目を据えてぢつと見詰める。變てそれと知る。飛び上つてよろめき近づく。) 目連尊者!

目連。(手をあげて) 叱つ! 静かに—— (二三歩前に出る。)

章提希。(跪いて目連にとりすがりて) あゝ目連尊者! わたしは……わたしは……。 (面を覆ふて忍び泣く。)

目連。(黙然として) 大夫人—— (無量の感慨に迫られて、ぢつと章提希を見下ろす。)

章提希。(歎歎しつゝ聲を忍ばせて) あゝ目連尊者! わたしはどんなにあなたをお待ちしてゐたことぞせう。どんなに待つてゐたことぞせう。だつて、だつて……(さめくと涙にくれて、怨むやうに) あなたは多くの世尊のお弟子の中で此王舎城の王族の血を引いて

をられる唯一のお方ではございませんか。わたし共が世にある頃は絶えず宮殿へ出入して尊い教法をお説き下されたではありませんか。その上、あなたは世尊の教團の中で神通第一の譽れを負ふてをられる方ですもの、假令どんなに激しい阿闍世の怨りを受けてをられやうとも、またこの深宮の警固が如何に嚴重であらうとも、こんなに恐しい闇黒の底に淪んでゐるわたしを顧みて下さらぬ筈はないと信じてゐました。……

目連。(静かに) 御尤もです。しかし——

章提希。(目連の言葉を碌々耳に容れやうともせず) でも、あゝ目連尊者! あなたは来て下された。到頭あなたは来て下された。わたしは嬉しうございます。本當に嬉しうございます。(涙にくれて) あゝ、わたしはあなたのお顔を見て始めて生きるといふことの苦しさや尊さが本當に分つたやうに思ひます。お聞き下さい、目連尊者—— わたしはこの薄暗い囚屋の中に押し籠められてから今日の日まで晝となく夜となく絶え

ず慄えつくやうな恐しいことを考へ續けてをりました。わたしは鷹のやうに眼を光らして自分の頭を打ち砕くことの出来るやうな固いものがこの部屋の何處かにあるまいかと捜し回りました。あゝ、わたしは幾度悪鬼に憑かれたやうにぢつと眼を据えて真夜中頃の眞暗い闇を見詰めながら、あゝ誰れかわたしのこの喉笛を掻き切つてくれたら！と聲に出だして泣き叫んだか。到頭わたしは舌を噛み切つて死なうと決心いたしました。あゝその瞬間であつた。何者かの優しい温かい手がそつとわたしの肩を抑えてくれるやうに感じたのは。忍べ、もう霎時だ！ さういふ叫びが耳元に叫ばれるやうに思はれた。わたしはぎよつとして我れに還りました。さうしてぢつと涙を噛んで激しい死の誘惑と闘ふて來たのです。

目連。あゝ大夫人！ あなたはよくこそ忍んでくれました。尊い魂は忍辱の鎧の下に護られねばなりません。あゝ、あなたは先づ第一にあなたに下された恐しい試練に勝られたのです。

韋提希。(急に固き聲になりて) 試練？

(深き溜息を洩して) あゝ、しかし何時までわたしはこ

の心の重荷に堪えることが出来るのかまるで自信がありません。わたしはゆら／＼と揺ぶられて崩れやうとする自分の心が恐しくなるのです。目連尊者！ あなたは毎朝一度づゝいかな貧しい梅陀羅でさへも食べはしまいと思はれるやうな粗末な食事を運んで來る婢女共の探るやうな眼付を見ることがわたしに取つてどんなに我慢の出来ないことだか想像がつかますか。(次第に胸の底からこみ上げて來る怒りに打ち勝たれてゆく。) そ、そればかりか、つい昨日まで王様の鳳輦の轅を握つてゐたやうな雜人共までが、今日は警護の役目を笠に着て丁度飼犬を見る主人のやうな横柄な態度を以てわたしに臨むではありませんか。あゝ、わたしはかうも堪え難い屈辱と缺乏とを忍んでまで生きてをられる自分だとは思はなかつた！ (昂奮して次第にヒステリカルになる。) あゝ目連尊者！ この淺猿しい囚人の姿を御覽下さい。檻に入れられた野獸のやうなこの淺猿しいわたしの姿を！ あゝ、どんな貧しい山賤の女房でもこの淺猿

しいわたしの境遇に比べられやうか！ (はらくと涙を流して狂はしげに) あゝ、わたしは何處までこんな淺猿しい姿になつて業を曝さねばならぬのか！ 全體わたしは宿昔どんな重い罪を犯してこんな嚴しい罰を受けねばならぬのか！ あゝ目連尊者——あなたはそれを御存じでせう。さあ仰がつて下さい！ 仰がつて下さい！ 仰がつて下さい！ (牀の上に突伏して激しく泣く。)

目連。(嘆息して) あゝ大夫人！ 恐しい苦惱の重荷はあなたの魂を押し潰さうとしてゐる。けれども今は徒らに昂奮して涙を流してゐる時ではありませんぞ！ 何故と言つてあなたは今あなたの一生の旅路に於て又と再び出逢ふことの無い嶮しい、しかし尊い關所に差しかゝつてをられるのだから。さうだ。第二の聖なる試みが今あなたの上に下されやうとしてゐるのでありますぞ！ あゝ、あなたは今こそどつと心を静めて……。

韋提希。(ふつと頭を揚げて遮る。) 心を鎮めて？ (反抗的に) ふむ、心を鎮めて静かに自らを

省みよと仰在るのでせう。(冷笑するやうに) さう。あなたは何時もさういふ風にお説法なさいましたわね。(目連手を揚げてすべてを包むやうな寛い態度を以て何か静かに言ひ出さんとする。それにかまはずにひどく昂奮して続ける。) でも、さういふ通り一遍のお言葉を承りたい爲にわたしは永い間妙りつくやうにあなたをお待ちしてゐたのでせうか。あゝ、わたしの渴くやうに覚えてゐたものはさういふ冷たい言葉では無かつた筈ぢや——

目連。(如何にも自然に再び手を揚げて制するやうに) 大夫人。あなたは——

韋提希。(相手には關はずにつゞける。) さうぢや。わたしは今何もかも分つたやうな氣がある。あなたのその冷たさが何處から來てゐるかといふことが。あゝ、それはあの世尊の澄み切つた眼です！ 眼の前に山が崩れて來ても動かぬといつたやうなあの落ちつき拂つた世尊の眼です！ (投げるやうに) 澄み切つた眼は冷たい心臓といふ道連れぢや。

目連。(窘めるやうに聲を強めて) 諸天の名のもとに、大夫人。如來世尊のお徳を讀すやうな

言葉は慎みなさい！

章提希。(反射的に)なぜです！ なぜです！

(一瞬間沈黙。忽ち堰を切つて押し流れるやうに)

ぜ、全體、わたしの夫とわたしとが永年の辛苦によつて築き上げた輝いた王座の上から忽ち暗黒のどん底に蹴落されて、かうも堪え難い屈辱を受けねばならぬ身の上となつたのには世尊にも責任が無いとは言はれやうか。(俄かに立ち上り、ちつと目連の眼

を見詰めて)目連尊者！ あなたは——あなたの眼は確かにわたしを無反省な愚かな女として憐れんでられるやうぢや。けれども、けれども、わたしはあなたの考へてをられるやうにそんなに自分に對して盲目な人間でありませうか。わたしは阿闍世の恐しい暴逆に對してはわたしにも罪が無いとは思ひませぬ。罪を感じればこそ二十餘年の長い年月を人知れず堪え難い苛責の鞭を忍んで來ました。あなたはまたわたしの苦みが足らぬと仰在るのですか！ この上尙わたしに苦しめと仰在るのか！
あゝ目連尊者！ あなたは阿闍世とわたし共との間に本當にしつくりとした和らぎ

を見出す爲にわたし共夫婦がどんなに苦心を嘗めどれだけの犠牲を拂ふて來たかを御存じですか。あゝ、その永年の苦心と犠牲とは一朝にして悪魔のやうな提婆達多の毒舌によつてかうも恐しい酬ひを受けやうとは！ さうぢや。提婆達多に唆かされなかつたら、あの子が如何に凶暴な天性を享けてゐるにしてもまさかにかうまでわたし共を苛む筈ではなかつたのぢや！ (昂奮し切つて) さうして、さうして、この惡逆の提婆達多は正しく世尊の從弟ではないか。あゝ世尊は全體何の因縁で提婆のやうな恐しい人間を眷屬にお持ちなされたのか！ あゝ世尊がもし三界の大導師であらりなされるならば、何よりもまづ惡人の提婆達多をお救ひになるのが本當ではありませんか！

目連。(温かい同悲に満ちた眼を以てちつと章提希を見詰める。やがて黙然として顔をそむけ、旁白する。) あゝ、無理もないことだ。(間。再び章提希を温かく見詰めて、靜かに) 大夫人。あなたは亂れてをられる。あなたは靜かに自己の背後を顧る眼を失はれた。あゝ、しかし、あな

たのやうに境遇の激變に逢ひ、あなたのやうに深い悲みと重い惱みを負ふてゐる心にそれだけの餘裕を持つことが出来ぬといふのは寧ろ當然のことであらうも知れませぬ。縦令あなたの言葉の中に大聖世尊に對する恐しい誤解と冒瀆とが纏れてゐやうとも、わたしは最早それをお咎めしやうとは思ひませぬ。(章提希次第に少しづつ、引き入れられて聞く。)何故と言つてわたしは今沁々とあなたの御身の上に無始以來茫茫として涯しも知らぬ生死しゅうじの曠野あれのをひとり淋しく彷徨さまよふて來たわたし自身の悲しい相すがたを見る事が出来るのだから。いや、寧ろ曠劫の昔から恐るべき煩惱の暴流ばうりゅうに打たれ、常に没しつみ常に流轉して泣き叫んで來た衆生の痛ましい聲を聞くことが出来るのだから。(靜かに胸の奥から湧き上つて來る熱情を抑えて)だが、あゝそれだからこそ大夫人！わたしはあなたの心の底に根強く横はつてゐる根本の無明と錯誤とを鋭く差し示さずにはをられませぬのぢや。(章提希の顔に突然激しき反感の色現はる。聲を強めて)さうぢや。あなたの味い心は今無上の智慧光を覓めて喘あはいてゐるのぢや！ あなたの汚れた魂

は温かい清淨光をもとめて咽び泣いてゐるのぢや！ あゝ、それでありながらあなたは靜かに確實にあなたに忍びよつて來るその黎明の光を恐れて慄おそえてゐるのぢや！ (嚴かなる調子にて) あゝ大夫人！ あなたは今二つの道の岐れに立つてをられるのでありますぞ！ 一つはもの凄あやい輪廻の道に。一つは永劫の救ひの道に——

章提希。(寧ろ嫌惡に近い眼を以て鋭く目連を見詰めて)目連尊者！ あ、あなたは——あなたは寒さに震えてゐるわたしの魂に氷の塊かたまりを投げつけるのですか！ あゝ、わたしの魂の渴くやうに求めてゐるものは百の説法ではなくしてたつた一片の熱い心です！ たつた一言の熱い言葉です！ (次第に言葉が急迫し悽愴の調を帯びて來る。)けれども、あゝそれは餘りに蟲のいゝ希願ねがひであつたのか。自らの切ない心が描き出した幻影にあやつられてこの玉の緒をつないで來たのか。(はらくと熱涙を流して)あゝ、わたしは最早この地上のすべてのものに希望を絶ちました！ わたしはもうこの濁惡じよくあくの閻浮提じやんぷだいに生しょうを享けてゐるたうはありません！ あゝこの凄まじく濁りに染みたる世界よ！ 地

獄、餓鬼、畜生などのもろくの善からぬ聚、恐しい族に盈ち満ちてゐる顛倒の世界よ！ わたしは餘りに恐しいお前の相を見せつけられた。もう充分ぢや。あゝわたしはもう悪人を見たくはない。悪聲を聞きたくはない。絶望的にあゝ死よ！ 死よ！ 死のみがわたしをこの濁悪の世界から救ふてくれるのだ！ あゝ、あゝ、あゝ。(牀の上にくづ折れて烈しく泣く。)

目連。(忽ち兩眼らんくとして靈火に燃えて壯嚴に輝く。嚴然として) あゝ、女人よ！ 汝はまことに心しん想さう羸る劣れの凡夫ぢや！

韋提希。(愕然として頭を揚げる。)

目連。あゝ、おん身は智眼ちげんくらくして自分自らの魂の行衛をたゞしく視通することが出来るのぢや！ おん身は死によつて苦惱の世界から救はれると思ふてをられるのか。あゝ死がどうしておん身の業ごうを除くことが出来るのぢや。おん身は死の彼方を泌々と眺めたことはあるのであるか！

韋提希。(強き威重を感じながら、思はず反射的に反抗して) 誰れが死の向ふの世界を知りませう。

目連。(權威を以て) 死の向ふの世界を開く鍵は唯本當に生きる人のみに恵まれるのぢや！ 本當にこの壯嚴な生の本流に馳せ參ずる度ましい魂の上のみ輝いた死の向ふの世界がほのくと開かれるのぢや！ 大夫人。あなたは死によつてあなたの苦みから脱れることは出来ない。あなたの無明とあなたの惑業わくごうとはあなたの魂を引き摺つて盡未來際の後までも恐しい六道の巷に輪廻せしめるであらう！

韋提希。(突き崩されたやうに) あゝ目連尊者！ あなたは……あなたは……。(亂れて) あなたはわたしの最後の安かな眠りの床をすら奪ふのですか！ あゝわたしは思ひ切つて死を撰ぶことさへ出来ぬのか！ あゝ、何といふ惨めな……何といふ殘酷な……。

(慟哭する)

風の音凄まじく戸外を過ぎ去る。餘韻遠く消え去らんとして咽び泣くやうに踏ふてゐる。

目連。(深き溜息を洩して) あゝ、生を求めて得ず、死を求めて得ず——それが哀れにも小さい凡ての人間の自らに目醒めた時の嘆きの聲ぢや。(熱意をこめて) あゝ大夫人! あなたは今こそきはつりとあなた自身が何物であるかを知らねばなりません。さうして今こそ法界にありとあらゆる一切衆生の心想事成の中に静かに嚴かに影現したまふ諸佛如來の聖なる思召しの前に跪かねばならぬのぢや! あゝ今こそあなたは大聖世尊の熱い御言葉を素直に虔ましく受け取らねばならぬ時が來たのですぞ!

韋提希。(愕然として) 何、大聖世尊?

目連。さうです! あなたは間もなく世尊のお姿を見られる筈ぢや。

韋提希。(躍るやうに立ち上り、霎時茫然として目連の顔を見る。突然) あゝ、それは本當ですか!

あゝ、夢ではあるまいか——

目連。大夫人! あの日大夫人幽閉の悲しい報知を握るや否や阿難とわたしとは同時に電のやうにあなたの心を感じました。さうして二人は直ちに世尊のみもとへ参り

ました。世尊はわたし共の顔を御覽なされると静かに瞑目して一言のお言葉もありませんでした。

韋提希。(黙つて目連を凝視する。)

目連。世尊の沈黙には常に甚深の意味がこはします。阿難とわたしとはちつと自らを制して世尊の御言葉を待たねばならなかつた。時は來ました。静かに考へに沈んでお出でなされた世尊は今宵俄かに大夫人訪問を仰せ出されました。われ／＼は狂喜して立ち上つた。さうして……

この時、吼えるやうな風の音が空を疾驅して目連の言葉を中斷する。騒音しばらく戸外につゞく。

韋提希。(深き感動を以て) あゝ、あゝ、世尊が! 世尊が! あゝ、この凄まじい風の吹き荒む闇の中を御老體におはします世尊が! あゝ、この息の窒るやうな囚屋の中へ! あゝ、わたしの胸は眞暗い悲みと不可思議な望みとが入り交つて破れさうぢや! (此時突如として不可測な我れにもあらぬ激しい反抗の念に襲はれて) だが、あゝ! それ

がどうしたといふのぢや。今更世尊にお會ひしてこのわたしがどうなるといふのぢや。(兩手で空を拂ふやうにしてよろ／＼する。)

目連。(耳を聳て) あゝ世尊がお見えです。

韋提希。あゝ——(暗い眼付をして射るやうに左の扉を見詰める。)

目連靜かに左に近づき扉を開いて鞠躬如として釋尊を迎へる。釋尊登場。七十歳あまりに見える。巍々として金山の如く穩かに輝いた風貌。靜かに澄んだ眼のうちには撰ばれたる聖者にのみゆるされる甚深の智慧と熱い同悲のこころとがもつれて壯嚴に流れてゐる。

つゞいて阿難登場。四十三四歳。顔容端政なる美丈夫。年齢よりも遙かに若く見ゆ。感慨無量の面持にて釋尊の右側に少し退いて立ち。涙ぐましき眼を以てちつと韋提希を見る。目連靜かに扉を閉ぢて釋尊の左側に立つ。

やゝ永き間、森嚴なる沈黙。

韋提希。(雲々茫然として夢見る如く立ち盡してゐたが、忽ち不可抗の力に牽かれるやうに、よろ／＼と二三歩前に近づき跪き合掌して) あゝ、世尊——(思はずはらくと熱き涙を滾ぼす。)

釋尊。(ちいつと温かき眼を韋提希に注いで、莊重に) 大夫人！ 恐しい人生の暴風雨の底に寂靜

の世界が嚴かに横はつてゐる。あゝ、大夫人！ 逆謗の屍骸にも等しきあなたの魂が甦るべき尊い時が來ました。あゝ、わしはどれだけその時を待つてゐたか。さうして今その時が來たのぢや！

韋提希涙に濡れた眼を揚げて釋尊を仰ぐ。一切を温かく包攝せねばおかぬ深き智慧と愛憐と、その莊重温雅なる態度とに壓倒せられて次第々に頭さがる。突然胸に飾りし瓔珞の紐を斷ち切つて傍に投げ、五體を地に投じて嗚咽する。霎時忍びやかに、次第に泣き聲激しくなり遂によゝとばかりに號泣する。

また一としきり烈風過ぎ去りて極度の靜寂來る。

釋尊を中心として室内極めて徐々に明るくなる。——靜かに暮。

第四幕

第一場

王舎城城門外の廣場。

左上手寄り正面へかけて斜に城門巍然として聳え立ち、その左右へ長く嚴めしく城壁が連つてゐる。その内側より樹木の茂み、宮殿の礎の一部が見え、遙かに高き一字の樓閣が墨畫のやうにうすく見られる。門外正面右に種々の樹木うつくしく群れ立ち、その向ふに遠く市街の一部が覗いてゐる。城門の左脇に門衛の屯所があり、その前に三十歳あまりの一人の門衛が立つてゐる。

第三幕より約二ヶ月の後、午后半ば頃の曇つた空。

提婆達多、弟子迦留羅（三十四五歳）を従へて右下手より登場する。

迦留羅。尊者！ 本當に久し振でございますね。此王舎城の城門をくゞりまするのは。提婆。さうぢや。頻婆娑羅王の崩御以來始めての參内ぢや。わしは少し考ふる所があつて態と暫く大王にお逢ひしなかつたのだ。

迦留羅。 それにしても太子様の御時分にはあれ程度々お音づれ遊ばされた迦耶の僧園へ近頃さつぱり大王の臨御がございませぬので、われ／＼弟子の間には聊か不審を抱いてゐるものもございする。それに——（考へて）尊者！ あの須那利多が昨日の朝も皮肉な調子で申してをりました。老王の崩御によつて阿闍世大王も可なりな試鍊にお會ひなされた譯ですつて。

提婆。（短く笑ふ）は、い、い。あの須那利多といふ男は兎角大袈裟な言葉の使ひ方をしたがる奴だ。老王の崩御は言はゞ豫定の筋書の通りに行つたまでのことさ。たゞこれからは、大王が新しい舞臺の上に立つてどういふ素晴らしい舞ひを舞はれるか、見ものなんだ。

迦留羅。（心地よげに城門を見上げて）尊者！ この城門も何時もとは違つて巍々として高く聳く聳え立つて見えるやうでございます。

提婆。（欣然として）あゝ、わしは一刻も早く大王にお逢ひしたくなつて來た。

提婆達多、門衛の敬禮に軽く酬みつゝ城門内を直視して大跨に歩みながら門内に入る。つゞいて迦留羅門衛に軽く會釋して入る。

門衛。(提婆の後姿を鳥渡顧みて) ああ、しつかりとした歩き振りはどうだ。あれが六十に近い老人だとは思はれやうか。あれはあの提婆尊者の巖丈な身體とざら／＼と光つた眼を見ると何となく五體が竦み上るやうな氣がする。大王の御師匠様ではあるけれども、どうもあれはあゝいふ人は——(ふつと言葉を切つて前方を注視して) おや、又誰れか沙門が来るやうだ。

阿難深き思案に沈める如く俯きて右下手より登場する。急ぎ足になり城門に近づく。

阿難。(門衛に目禮して) 鳥渡お訊ね申すが、あの、提婆尊者はこちらへ見えなかつたでせうか。

門衛。(それには答へずに、しげ／＼と阿難を見て) あなたは阿難尊者ですね。

阿難。(少しせき込んで) 實はこちらの方へわたしの兄の提婆達多が參られた様子を途中で聞いて、急いで後を追ふてやつて來たのですが。

門衛。(何か他のことを考へてゐるやうな調子にて) 提婆尊者はたつた今しがた參内せられました。

阿難。たつた今しがた? あゝ、それは残念であつた。(姑く考へて門衛の顔を見て) それでは退出せられる時刻の程も分りますまいな。

門衛。(黙つたまゝちつと阿難を見詰めてをる。)

阿難。(深き溜息を洩して獨白の如く) あゝ、今日も亦逢ふことが出来ぬのか——(悄然として右上手に退場せんとし、遽かに何か考へついたやうにふつと上手の樹木のあたりに立ち停まる。霎時して鳥渡城門の方を顧み、それから深き考へに沈めるものゝ如く首を垂れて、樹林の間を靜かにあちこちと歩き回る。)

門衛。(阿難を見送つて) あの何時までも少年のやうな潤ひのある綺麗な眼はどうだらう—あゝいふ美しい男が出家をするなんて間違つてゐるやうだ。男のおれでさへ惚れ／＼する位だから、街の若い娘達などがあの人の托鉢に出るのを見ては騒ぐといふのも無理もないことさな。はつは。(考へ込むやうに) ふむ。同じ兄弟でも兄さんの

提婆尊者とはあゝも違ふものかな。

間。忽ち「な、何といふことだ！」と叫びつゝ提婆達多城門より出づ。迦留羅ついで出づ。門衛ぎよつとして提婆を凝視する。

提婆。(迦留羅を顧みて、怒氣を含んだ調子で) 迦留羅！ これは一體どうしたことだ！

迦留羅。尊者！ 何者か大王に向つてあなたを中傷した者があるのではございますまいか。あの狡猾な釋迦の弟子共が――

提婆。(頷いて) うん。わしも先刻そんな気がちらりと射したのだつた。あの侍従が出て来て大王との會見を謝絶した時にな。――ふむ。誰れかあの酔はすやうなお説法を以て大王の魂を捕えかけてゐるのかも知れない。人生は無常である……といふやうな調子でな。チョッ！ 何といふことだ。

迦留羅。(忌々しげに) 無常と言へば、事によると頻婆娑羅王崩御の後に間もなく母君の韋提希夫人の幽閉を許されたといふ世間の噂が本當かも知れないと思はれます。

提婆。ふむ。まさかと思ふて聞き流しにしてゐたが――(胸の底からこみ上げて来る怒りに打ち勝たれて) あゝ、わしはこれまで大王からかういふ冷やかな待遇を受けたことは一

度もないのだ。いや、大王は何時も最上無上の禮を以て厚くわしを遇せられたのぢや。それに……。 (忿怒の爲に言葉が切れる。)

迦留羅。(激して) 尊者！ これが御師匠のあなたに對する道と言はれませうか。身分も何もない臣下にでも對するやうなこの粗傲な仕打ちが！ この堪え難い侮辱が！

提婆。(次第に平靜をとりかへして) 侮辱は忍ぶことが出来る。けれども大王の魂の退轉は忍ぶことが出来ない。(舞臺の前面に遽然として立停つて) 迦留羅！ わしはもう一度御所へとつてかへして、是が非でも大王に會はねばならぬ。大王の尊い魂をあの胡麻化したものゝ釋迦の弟子共より取りかへす爲に――

提婆達多つかくくと二三歩城門の方へとつてかへしたが、急に何か考へついたやうに再び立ち停る。

この時、阿難、提婆を見つけ、急ぎ近づく。

阿難。(懐しさうに) あゝ兄上——

提婆。(むつつりとして) 阿難か。

阿難。(提婆の手をとり、ちつとその顔を見詰めて泪ぐむ。)

提婆。(さすがに少し動かされて) しばらくぢやつたな。

間。

阿難。(手を分ち、思ひ入った調子で) 兄上。わたしは是非お願ひ申したい儀がありました。

此間からあなたにお目にかゝる爲にどれだけ苦心したか知れませぬ。

提婆。(軽く) 何かな。

阿難。(必々と) わたしは今多くを申し上げたくはありません。多くを語るには餘りに

わたしの情緒が亂れてをりますから。(決然として) 兄上！ あなたはもう一度世尊の

教團へ還つて下されたい！

迦留羅俄に鋭く阿難を見詰める。

提婆。はつは。何事かと思へば……。

阿難。兄上！ 世尊は程なく耆闍崛山を去て拘尸城の方へ遊行せられやうとしてをられるのでございます。御覽の如く世尊も最早御高齢におはしますれば、或は再びこの王舎城下をお音づれ遊ばす時期もどうかと覺束なく思はれます。で、此際兄上が再び世尊へお還へり下され、教團の人々と打ち和らいで下されましたならば、世尊もどれ程にか御満足遊ばされることでもございませう。事實、世尊は今兄上に恵まれたる高さ才幹と深き智慧とに對して限りなく遣瀨ない愛惜の思ひに沈んでお出で遊ばされるのですから。兄上！ わたしがどのやうにもお取りなしを致します。どうぞもう一度世尊にお還へり下さるやうに切にお願ひ申し上げます。

提婆。(ちつと憐れむやうに阿難を見詰めて) 阿難！ お前はわしが釋迦を捨て、遁走したものの、やうに思ひ誤つてゐるな。だから世尊に還れなど、言ひ出すのだ。だがそれはわしを見縊ることにならないまでも少くともわしを見損ふことになるのだぞ！

(阿難涙ぐましい眼を揚げて何か言ひ出でんとする。それを抑えるやうに) まあ聴け阿難! わしは釋迦を見捨てゝはゐないのだ。何故と言つて見捨てるといふことは路傍の人となつて生きるといふことだから。さうしてわしはまだあの老人を路傍の人とする程に見縊つてゐないのだから。いや、それどころかわしは釋迦がこの閻浮提の世界に負ふてゐる使命の大きさを知つてゐる。競々として釋迦の一言一句の前にひれ伏して只管にたがはざらんことを之れ恐れてゐるお前達の誰れよりもよく知つてゐる積りだぞ。さればこそわしは釋迦のいのちの涸れて行かうとするのを悲しむのぢや。見よ! 釋迦が成道(じょうどう)を宣言して以來四十餘年の永い説法の生活はぢりぢりぢりぢり〜と彼れの當初のいのちの鮮かさを奪つて、次第々に彼れを「渾然とした圓熟の境地」に封じ込めやうとしてゐるではないか。さうしてそこには冷たい寂滅(じやくめつ)が待つてゐるだけだ。あゝ何といふ恐しいことだ! だが、それよりも更に恐しいことは、かうしてとぼ〜と歩いて行く釋迦の足跡を數限りもない形ばかりの釋迦の模倣者と追隨者

とがよろめき乍ら歩いてゐるといふことだ。阿難、わしがこの度或る堪え難い私情を抛つて態々竹林精舎に釋迦を訪問したのは釋迦の教團を救ふ爲であつたのぢや。濁つた教團を廓清して新しいいのちを盛らんが爲であつたのだ! けれども悲しいことには釋迦はわしの心持をまるで理解してくれなかつた。釋迦の周圍を取り巻いてゐる多くの有象無象は頭からわしを叛逆者として取り扱つてゐた。さうして冷たい嘲りの眼をわしに向けてゐた。……

阿難。(思はず獨自の如くに) あゝ、そこには泪に濡れた二つの眼があつたのに――

提婆。(耳にも容れずに昂奮して) けれどもわしはぢつと忍んだ。わしは言葉を低うしてわしの心持を三度まで釋迦に訴へた。さうして三度とも峻烈に拒絶された。うむ、そればかりか、最後に釋迦は何と叫んだか。汝、傲慢にして天を畏れず人を敬はず、さうして自ら耻づることを知らぬ愚昧な奴は教團を汚しこそすれ廓清などゝは思ひもよらぬことだと惡罵したではないか!

迦留羅。(思はず拳を握つて叫ぶ。)さうだ！ち、畜生ッ！

提婆。阿難！わしはこの刹那に人間の尊いいのちを冒瀆したこの愚劣な罵りの言葉の價を知らせてやらうと決心しのぢや。

阿難。(悲しげに)あゝ兄上！兄上！あなたは どうして——(無量の感慨に迫られて言葉がふつと切れる。)

提婆。(昂奮のあまり阿難の言葉をとりちがへて) どうして？(突嗟に右の拳を堅く握りしめて前にさし

出して) 見よ！こゝに金剛のやうな固い提婆の拳がある！この拳をあ言葉だ
けて内容のない和合と統一とを唱へ、寂靜じやくじやうの涅槃といふ夢を食ふて生きてゐる釋迦
の澱んだ頭の中に打ち込むのだ！

迦留羅。あゝ！(肩をゆすぶつて心地よげに阿難を見やる。)

阿難。(同時に叫ぶ)あゝ恐しい！あゝあなたは……あなたは……。あゝ天魔！波旬！
恐るべき悪魔があなたに乗り移つたのぢや。

提婆。(腹の底からせり上げるやうに高く笑ふ。)あつはつはつは。悪魔は寧ろ苟安と妥協とに
浸つてゐるお前達の胸の奥深くにこそ宿つてをらうぞ！阿難。お前は嘗て一人の
盲目めくらみが多くおの盲目の群れを導いて一人も残らずみんなが深い川へ落ちて死んだとい
ふあの釋迦の巧みな譬喩を聞いたことがあるだらう。所が、あの機智に富んだ一場
の寓話がその儘自分と自分の弟子達の將來を豫言してゐたのだとはさすがの釋迦も
氣がつかかなかつたに相違ない。見るがいゝ、釋迦の足跡をおづ／＼と踏みつゝ影繪
のやうに長い淋しい列を作つて歩いて行くお前達の哀れな姿を！先達の一人の盲
目を打ち斃すことはあとに跟いて来る多くの盲目を深い淵から救ふことにならない
とはどうして言へるのだ。

阿難。(むらがり来る激情をぢつと抑えて)あゝ兄上！あなたは……。 (咽ぶやうに)あゝ、怖
るべき橋慢の悪魔があなたの心臓を噛み碎いてゐるのです。

提婆。(斷乎とした調子にて)わしはどうして橋慢であり得るのだ！如何ほど橋慢に見

えやうともわしはそれ以上に大きい魂を持つてゐるのだ！ 天輪聖王は如何程高ぶつても高ぶり過ぎると言はれやうか！

阿難。(鋭く提婆を見詰めて) 兄上！ あなたはあなたの高擧と感激とのうしろに堀られた恐しい悪魔の陥穽に落ち入つてをられますぞ！ あゝあなたは萬人の胸を貫いて永劫に流れる本願の流れに馳せ參ずることは、たゞ度ましい合掌の魂にのみゆるされることを忘れられたのでありますか！ (深き嘆息を洩して) あゝ、わたしは今思ひ出さずにはをられない。われ／＼が始めて出家した當時のあの度ましい純淨な魂の尊さを。あゝ兄上！ あなたはあの時われ／＼釋迦種族の王子達が重々しく四種の兵に護衛せられて久しく住み馴れた宮殿の門に永久に別れを告げた折のあの悲愴な心持をよもやお忘れはなされますまい。あのこんもりとした國境の沙羅の樹影に車を停めて、今の今までわれ／＼を飾てゐた眩いばかりに輝いた寶玉と羅の寶衣とをすつかり脱ぎ去つて、あの粗末な黄色い鬱多羅の僧衣に着かへた時の緊張した心持を

よもやお忘れではありますまい。

提婆。(顔の筋肉一寸動かさずに氷のやうな冷たい眼差しを以て、ぢつと聞いてゐる。)

阿難。(熱情に燃えて) あゝ兄上！ あの時の世尊を覓むるわれ／＼の切なる心とわれわれを待つてをられた世尊の温かい御心——あゝそこには何といふびつたりとした一致と嚴かな階調とがあつたこととせう！ われ／＼は世尊の前に跪いて先づ第一に最後までわれ／＼に宮仕へして涙ながらにわれらと一緒に出家する許しを請ふてやまなかつたあの理髮師の優波利を得度して頂くやうにお願ひ申し上げました。さうして優波利を教法の先達と仰いで彼れを禮拜し、迎禮し、合掌禮してそれから得度して頂いたのであります。あゝそれは自らの地位と境遇とに根ざしてゐる恐しい僞慢と錯誤とから先づ第一にわたし共を救ふためであつたではございませんか。あの時分の博い心、純なこゝろ——野徑を走る小犬にも手さし延べて抱きつきたいこゝろ！ 森の木影におのゝいてゐる一枚の草の葉にも合掌したいこゝろ！

あゝ、あの度ましい尊いころは何時の間にもあなたを見捨て、しまつたのか。(無限の熱意を籠めて哀願するやうに) あゝ兄上! あなたの大きい魂がああ純淨な度ましさを取りかへしてもう一度世尊に結びついて下されたならば、ありとあらゆる法界の衆生は普く甘露の法雨に濡れ輝くであります。

この言葉の終らぬ中に提婆達多の弟子乾陀、三閩達多の兩人息を切つて右下手より慌しく登場する。迦留羅直覺的に不吉な豫感に襲はれて、ぎよつとして二人を凝視する。

乾陀。(喘ぎつゝ)尊者! これに渡られましたか。

三閩達多。一大事でございます。

提婆。(憐れむやうにちつと阿難を見詰めてゐた眼を靜かに二人に轉じて)何事ぢや。

乾陀。あゝわたくしは――

提婆。(重ねて)何事が起つたのぢや、

乾陀三閩達多顔を見合して躊躇する。

迦留羅。(堪らなくなつたやうに)乾陀!
一體どうしたのだ。

乾陀。(迦留羅をちつと見詰めて答へず。)

提婆。(苦々しげに)ふむ。何かまた卑地國から來た新しい弟子共が諍ひでも始めたといふのかな。

乾陀。そ、それどころではございません、尊者!
(思ひ切つた様子にて)あの、舍利弗と

目連とが……。

提婆。何!
(きらりと眼が光る。)

乾陀。……あなたがち出掛けになつて霎時すると突然われ／＼の僧園へ姿を現はしました。(阿難一瞬時にして何事かを察したらしく極度の緊張を以て乾陀を見詰める。)さうしていきなり猛虎の吼えるやうに目連が宣言しました。釋迦牟尼世尊の弟子舍利弗目連の兩人は今諸天の御導きに依つて墮地獄の道を急いでゐる汝等の魂を法性の都へ取りかへす爲に來たのであるぞと。

提婆。(屹と眼を据えて) うむ。

乾陀。尊者！(拳を握つて) あの二人の侵入者は饑のやうに燃ゆる眼を注ぎつゝ、代るく、釋迦の偉大を讚美し、釋迦のみが衆生の魂を光明の世界に導く一乗の法を説く覺者であると叫びました。

三聞達多。さうして、あなたの叛逆の罪を鳴らして、大聖世尊にそむいて自ら暗い滅びの道を急いでゐる教法の大罪人であると罵りました。この謗法の罪人の教へを信ずるものは永劫に阿修羅、天龍、夜叉、惡鬼、羅刹、この三千界にありとあらゆる惡魔の黒い呪ひの息を脱れることは出来ぬぞと叫びました。

乾陀。舍利弗は最後に聲を勵まして説きました。諦かに聽け！ 卿等にして眞實に自らの魂を愛するならば、今や大聖世尊に還らねばならぬ！ 何故ならば世尊のみ教によつてのみ卿等は無央數劫の古へより盡未來際の末へかけて三世の諸佛のもろとも踏みたまふ一乗の道をさし示さるゝであらうから——

提婆。(冷笑して) ふむ。わしはこの自らの耳であの小僧等の世迷言を聞くことの出来なかつたのが残念ぢや。

三聞達多。尊者！ わたしはこの無禮な大道演説師共を掴み出さうと構いてゐた若い弟子達が、奇怪にも次第々々にあいつ等の詭辯に耳を傾け出したことを發見した時には全く目の前が暗くなつたやうに感じました。わたしは堪らなくなつて拳を握つてあいつ等に打つて掛らうと致しました。その時でした。われ／＼の群れの中から須那利多が礫のやうに前へ飛び出したのは！

提婆。おゝ須那利多はあの瞞しもの共を罵りかへしたであらうな。さうしてわしの弟子達の動搖を鎮めたであらうな。(三聞達多の顔を覗き込むやうにして) あの男にはそれ位のことは出来る筈だ。あの男はしつかりとした頭の持主だ。

三聞達多。(拳を握つて無念さうに) 尊者！ まるつきり反對です。須那利多はあの二人の盗人共の足元に身を投げて諸天の名を呼んで歸順の證を立てたのです。

提婆。(物凄く眼を光らして) 何!

乾陀。須那利多が歸順の證を立てると頽雪たふさの崩れるやうに多くの弟子達はあの賣僧共の前へ押し寄せて跪いてしまひました。あゝ――

提婆。(地面を踏んで) あゝ何といふことだ!

迦留羅。(突然破れたやうに叫ぶ。) あゝ、あの卑怯な裏切者! 師を賣り友を賣つた犬奴!

あゝ、おれは平生からあいつの態度が怪しいと思ふてゐた。畜生ツ! 畜生ツ!

畜生ツ! (忿怒のあまりに拳を握る。)

乾陀。迦留羅! おれはその時思はず須那利多の肩を掴んであいつの不信を詰つたのだ。あいつは唯うつむいてさめくと泣いてゐた。

迦留羅。(乾陀を睨みつけて) 乾陀! そなたは何故その場であの人でなしの畜生に天誅を加へてやらなかつたのだ!

三聞達多。おれは本當にあいつを叩き殺してやりたかつた。おれは拳を握つて處さら

はずあいつの身體を撲りつけた。それだのにあいつは少しの抵抗もせず石のやうにぢつとしてゐた。本當におれはあの卑地國から來た若い弟子共が留めなかつたらあいつを撲り殺したに相違ないのだ!

提婆。(堪りかねて) おゝ瞿伽離は! 瞿伽離はどうした!

三聞達多。尊者! 瞿伽離は焔のやうな息を吐いて阿修羅王の荒れるやうに舍利弗や目連と抗争しました。地上のあらゆる悲痛な言葉を以てあいつ等を罵りつゞけました。けれどもあゝ大勢は如何ともすることが出来ませず、われづゝの僧團の殆ど全部があゝの魔法師共に従つて伽耶の丘上を去つてしまひました。

提婆。(絶望的に) あゝ何といふことだ! わしの灼熱した魂の王國建設の礎となるべき五百の弟子等は一朝にして舍利弗目連輩の甘言に惑はされてわしを捨て、去つたのか。

三聞達多。尊者! 瞿伽離は餘りにひどく昂奮した結果遂に卒倒してしまひました。

さうして焼くやうな激しい熱にうかされて、眼を引きつらして譚話のやうに舍利弗と目連の名を呼んで罵りやまぬのでございます。

乾陀。瞿伽離は最後まで勇士として踏みとどまつて健闘しました。さうして恐しい憤りの炎に焼かれて悲愴なる死の床に藻掻いてゐるのでございます（はらくと涙を滾す。）

提婆。（静かに眼を閉づる。やがて感慨無量の調子にて）あゝ、瞿伽離は逝くのか。わしの第一の同志であつた瞿伽離は遂に逝くのであるか。（間。）よし！ 逝くものは逝け！ 去るものは去れ！ 假令運命の暴虐がわしと志を同じうする者の最後の一人までわしの身から剥ぎ去らうとも、わしの世界の輝きを奪ふことは出来ないぞ！ わしの五體に熱い血潮の一滴でも残る限りは、わしの魂の尊嚴を高らかに唱へずには置かないぞ！（屹と眼を据えて空を睨む。）

阿難。（慘として）あゝ兄上！ 兄上！ わたしは何といふことは聞かねばならぬのです。あゝわたしの胸は今あなたの悲痛な心持を憶ふ思ひで破れさうです。けれど

も兄上！ 諸天が今われ／＼の上に恵み深き「時」をお下しなされたのではありますまいか。さうです。時が来たのです。あなたの魂が最後の一關を突破して世尊に還るべき尊い時が来たのです！

乾陀、三聞達多、突然恐しく阿難に對して敵意を現はし、ぢり／＼と阿難に詰めよせる。阿難涙ぐんだ眼を揚げて一心に祈るやうに提婆の眼の中を見詰める。

提婆。（射るやうに阿難を見返して）さうだ阿難！ 時が来たのだ。今こそ提婆のこの鐵拳を釋迦の腦天に撃ち込むべき時が来たのだ！

阿難。（はら／＼と涙を流して）あゝ兄上！ あなたはどうしてもあなたの弟のこの熱い心を拒絶せられるのでありますか。あゝ、あなたの弟が今どんな氣持であなたの前に立つてゐるかを本當に分つて下されたら！ あゝ兄上！ わたしと同じい母胎からこの閻浮提の世界へ生み落されたたつた一人の懐しい兄上！ あゝあなたは世尊がわれ／＼の從兄にあたらせられることをお忘れなされたのでありますか。あゝ、わ

れ／＼の出家してからこのかた永年の間世尊がどれだけ温かい愛護と尊い提撕とを
 與へてわれ／＼の魂を劬はり羽含んで下されたかをお忘れなされたのでございます
 か。それに、あゝ、この切つても切れぬ同じい血を享けた吾等骨肉の親を以てかう
 しも恐い送相呑嚙しつこうどんせいの爪を研がねばならぬとは！ あゝ、わが愛する兄上よ！ あな
 たは今静かにお考へ下されねばなりません。淺猿しい抗争つちの裏から生れ出づるもの
 は何であるかといふことを。あゝそこにはだゝ悪魔がもの凄く凱歌を奏するのみで
 ありません。兄上！ 眞實の世界は唯魂と魂との抱擁のうちから攝取の中から生れ
 ねばなりません。あなたが何處までも世尊を敵として闘はうとする恐しい一念の執
 着の火はあなたの尊い魂を焼き亡さねば置きませぬぞ！

提婆。阿難、よく聞くがいゝ。提婆には敵といふものは無いぞ！ わしは和らぎの名の
 下に巧みに相手を征服しやうとする狡猾な心に唾を吐きかけてやる。わしは唯わし
 の歩み行く道に横はつてわしを妨げる石塊いしころを除くだけだ。わしは舍利弗や目連のや

うな小僧共を相手にするやうな小さい人間ではない。いや、お前達が師と仰ぎ自ら
 佛陀の名を僭してゐる釋迦でさへも最早わしの敵ではないのだ。たゞわしの途をふ
 さぐ一塊の岩石に過ぎないのだ！

阿難。(激しく)その岩石をあなたの拳が打ち砕くといふのですか。あなたの拳こそ打
 ち砕かれぬやうに用心したがいゝ！

乾陀。三聞達多。(同時に)何を！ (いきまく。)

提婆。(阿難を睨みつけて)さかしらもの！ 退れ！

阿難。(火のやうに)提婆達多！ 汝は今世に敵といふものが無いと言つた。さういふ
 ことを言ひながら汝は汝の骨肉にして同時に汝の恩師たる世尊を仇敵のやうに亡さ
 うとするのだ！ 唾を吐きかけぬばならぬのは寧ろ汝自身の狡猾と矛盾とを自覺す
 ることの出来ぬその混沌たる心であらうぞ！ 提婆達多！ わしは今この刹那から
 堂々として汝を敵として宣言する。わしは衆生の魂を愛するが故に汝と闘はねばな

らぬのだ。汝の暴逆から大聖世尊を護らねばならぬのだ。

阿難涙に光る眼を揚げて霎時ちつと提婆を見詰める。それから静かに踵をかへして上手に去る。

提婆憐れむやうな眼差しを以てちつと阿難を見送る。

乾陀、三聞達多血相を變へて阿難を追はんとする。

提婆。待て！ 何事ぢや。

乾陀。(息をはづまして)だと言つて見すく阿難を――

三聞達多。あの優しい顔をした一つ穴の狐を……。

提婆。逃がすのが残念だといふのか。狐には獅子の心は分らぬわ！ うつちやつて置け！

乾陀、三聞達多口惜しさうに齒がみをして阿難の後姿を睨んでゐる。

この時蓮華色誰れかを待つものゝ如く後を顧みつゝ城門より現はる。人々の注意が吸はれるやうに蓮華色に集る。

迦留羅。(思はず叫ぶ。)あいつだ！ あの阿魔だ！ 尊者と大王との間を離間してしまつたのは――

蓮華色提婆を見つけてぎよつとする。暗い影がさつと顔を過ぎる。直ちに己れにかへり提婆に目禮して上手に去らんとする。

提婆。(つかくと二三歩進み出て)蓮華色！

蓮華色。(顧みて不可抗の力に引かれるやうに提婆に近づきて)何か御用でございますか。

提婆。(つくづくと蓮華色を見て)久しぶりだな、蓮華色。うむ、久しぶりでそなたの眞珠のやうな美しい眼を見るわい、は、い。したが、そなたのその綺麗な眼は何故星のやうに輝かずして黒い大地に吸ひつけられてゐるのぢや。そなたは何故喪家の狗のやうに眉を伏せて歩くのだ。何故わしの眼を見ないのだ。

間。恐しい沈黙が支配する。

提婆。蓮華色！ そなたは何故わしを避けるのだ！

蓮華色。(静かに見上げて)尊者！ あなたを避けねばならぬ理由がわたしにございませうか。

提婆。(弾きかへすやうに)それをわしに訊かうとするのか。耻を知れ、蓮華色。そなたはわしに反抗しわしを胡麻化さうと藻掻いてゐるな。だが見よ。そなたの赤い唇は怖れの爲に顫えてゐるのではないか。そなたの唇は今後宮に取り入つてわしを讒言し、わしを罵り、わしの道を妨げやうとした報ひを受けてゐるのだ!

蓮華色。(ちつと提婆を見詰めて)わたしはわたしの道を行くだけです。他人の道を妨げたりする暇はありませんね!

提婆。(激して)言ふな蓮華色! そなたの薄い唇は幽閉せられてゐた韋提希夫人を明るく窓のもとに救ひ出した。さうして阿闍世大王の魂からすべての輝きを奪つてしまつたのだ!

蓮華色。(思はず皮肉な調子になりて)ほう。それは恐らく大王の魂が悪魔の胎内から人間の世界に生れ出やうとして惱んでをられるせいでございませう。

提婆。(遽かに殺氣立つて)何をツ! このいかさまの女潜り奴!

提婆達多突如に足を踏み開いて鐵拳を振上げる。蓮華色避けんとして能はず、絶望の色さつと走る。同時に電光の如く蓮華色の頭上に提婆の拳が打ち下される。蓮華色あつと叫んで地上に倒れる。口より夥しく鮮血流れ出づる。

提婆。(魔のやうに哄笑する。)はつはつは。わしの行手を妨げる小さい石塊は碎かれた。

提婆達多悠然として大跨に歩んで右下手に退場する。迦留羅、三閻達多氣味よげに顔を見合はして隨ふ。乾陀、蓮華色の上に鳥渡憐みの眸子を投げてあとを追ふて退場する。

門衛。(青ざめて思はず獨語する。)あゝ、恐しいことをする、提婆は――

この時娑羅跋提門を出づる。白衣をつけ比丘尼の姿になつてゐる。

娑羅跋提。(ぎよつとして)何! 提婆ですつて?

門衛。(愴然として黙したまふ蓮華色を指す。)

娑羅跋提。(倒れてゐる蓮華色を見つけ愕いて駈け寄る。)あゝ蓮華色様! (血を見つける。)あつ、血が! ど、どうなさつたのです。(抱き上げやうとして恐しく心臓の亂れてゐるのに氣付く。

あゝ、この刻ひやうに早く打つてゐる恐しい動悸は! 蓮華色様……蓮華色様……

蓮華色。(唯苦しきうに呻いてゐる。)

娑羅跋提。(おろくして) あゝ、お分りになりませぬか、蓮華色様。わたしです、娑羅跋提です。(獨白のやうに) あゝ、たつた一と足後れた爲にこれは又何といふことになつたのぢや。(蓮華色を抱き上げ耳元に口をあてて) 蓮華色様！ 蓮華色様！ お氣を確かにかに――

蓮華色。(幽かに目を見開き) あゝ、娑羅跋提……。 (喘ぐやうに大きい息を一つして、がつくりと息絶ゆ。)

娑羅跋提。(今更のやうに愕然として) あゝ、あなたは。あなたは到頭―― (もう一度呼んで見る) 蓮華色様！ (ちつと見詰めて) あゝ、これは夢ではあるまいか。夢ではあるまいか。たつた今の今まであの宮殿の明るい御部屋で大夫人様と御一緒にあなたの尊いお話を聴聞してをりましたのに。(茫然として) あゝ、これはどうしたことぢや。一體どうして―― (電のやうに或る想念の閃きを感じる。) あつ！ さうぢや。さうに違ひない。

(彈かれたやうに立ち上り、窺ふやうにあたりを見回し、それからちつと蓮華色の屍骸を見下す。無限の忿怒と痛恨とに顛えつゝ) あゝ、矢ッ張り娑羅跋提が殺したのか。娑羅跋提があなたの尊い生命を奪つたのか！ (よろくとして屍骸の傍に崩れて) あゝ、蓮華色様！ あゝ、永年の間身命をかへりみずして教法の爲にお盡しなされたあなたの尊い忍辱と精進との生活が、かうも殘虐な死によつて酬わられねばならなかつたのでございますか。さうして最後に阿闍世大王の惱み多き魂を世尊にお導きなされやうといふ畢生の努力と希願とが、かうも慌しい死によつて断ち切られねばならなかつたのでございますか。(再び蓮華色の屍骸を抱いてちつと見詰める。) あゝ、この靜かに穩かに澄み渡つた尊いお顔は！ この恵まれた高き者にのみゆるされる尊い死顔は！ あゝ、蓮華色様！ あゝ、あなたのこの眠るが如き安らかなお顔はあなたの最後の熱い念願が何時かは果遂せられねばならぬといふあなたの堅い信念を語つてをられます。最後の勝利が正しきものゝ上になければならぬことを約束してをられます。(此時突如として暴流の如き熱涙に襲はる。) あ

い、それにしても蓮華色様！ あなたは到頭逝かれたのか。この年とつたわたしをあとに遺して逝かれたのか。あなたのお導きによつて漸く教法そくほの道に入つたばかりのわたしを遺して……。あゝわたしはこれから誰れを手頼りにすればいいのでせう。あゝわたしはあなたを知ること餘りに遅く、さうして餘りに迅かにあなたにお別れせねばならないのです。あゝ、それがわたしの拙ない運命であつたのでございますか。あゝ、蓮華色様……蓮華色様……。

婆羅跋提狂へる如く屍骸にとりすがりて慟哭する。——幕。

第二場

王舎城内の宏壯なる樓閣の上。

舞臺前面及び上手の左右に高き圓柱が立ち、其向ふ正面の奥に欄が亘つてゐる。そこには午後半ば過ぎの初秋の日光がましてゐる。欄の彼方に種々の樹木の頂きが見え、その遙か向ふに着聞せきん嶺山の蒼鬱たる綠樹を望む。中央に莊重典雅なる大型の彫刻せる圓卓があり、卓の周圍に莊麗なる一脚の安樂椅子と三四脚の椅子が置かれてある。

右側上手寄及び左側中程に階下に通ずる階段あることゝち。

第一場より十日あまりの後。

王妃婆羅羅右手の階段より登場。頭には王妃の冠を頂き、胸には七寶を以て合成せる瓔珞を飾る。病餘の人のやうに面蒼れがしてゐる。

婆羅羅。(立ち停りあたりを見回して感慨深く) あゝ、この高い樓閣の上にももう秋の氣分が濃く流れてゐる。あゝ何時の間にかやら惱ましい春も逝き強烈な眞夏の日差しも過ぎ

去つて、風の戦ぎもめつきりと秋らしくなつて來た。どうしてかうも慌しい此頃のわたしの心だらう。(欄に近づき遙かに耆闍崛山を仰ぎて) あゝ、あのこんもりとした耆闍崛山の繁みの上に柔かい日光がしん／＼として音もなく降り灑いでゐる。あの蒼々とした樹影の間に釋迦牟尼世尊の妙法御説法の尊い御聲が静かに流れてゐたのであるか。さうしてその時御父上頻婆娑羅王様はあの恐しい牢獄の石の窓からあの神聖なる森蔭の會座を仰いで、静かに合掌しつゝ世尊を憶念してお出で遊ばされたのか。(合掌し瞑目する。間。咽ぶやうに) あゝその御父上は永劫に歸らぬ旅路におつきなされたのか。泣いてゐるわたしを残して、慈父のやうにお慕ひ申してゐる人民をすてゝ――(涙ぐみつゝふらく／＼と卓子の方にかへり、椅子の上にくづ折れて、卓子に両手をのせてうつむく。)

やゝ長き間。

章提希夫人右上手より静かに登場。第三幕に現はれしとは全く別人の如き洗練されたる明るさをもつた風貌である。

章提希。(静かに) 婆娑羅――

婆娑羅。(傳いて顔を揚げて) まあ、お母あさま―― (泪ぐんだ眼に淋しい笑みを作つて、立ち上つて)

章提希を迎える。

章提希。(婆娑羅の顔をちつと眺めて、優しく) 矢ッ張り顔色がよくないねお前は。用心をせぬといけませんよ。

婆娑羅。有難う、お母あさま。気分はもう餘程いゝのでございますけれど、それで久しぶりでこの見晴しのいゝ樓閣の静けさの中に浸りたいと思ふて上つて來たのですけれど、此處へ參れば參つたで矢張り色々の悲しいことが思ひ出されるのでございます。(ふつと涙聲になりて) あの青々としたうつくしい耆闍崛山の木立を見てゐますと牢屋の中から遙かに釋迦如來様に合掌してお出で遊ばした御父上の悲しいお姿がはつきりと見えるやうな氣がするのですもの……。

章提希。(暗い影がさつと顔を過ぎ去る。強き自制を以て明るい調子にならうと努めつゝ) だがの婆娑羅や。お前はもつと氣を確かに持つてくれなくつては。お前の心はこの頃ひどく感じ

易くなつてゐるやうだから。(次第に婆滋羅よりも寧ろ自分に説き聞かしてゐるやうな調子になる。) 本當に過ぎ去つたことは何と思ふた所でどうすることも出来ませんからね。それはどんな尊い神通力を恵まれた聖者でも自らの過去の罪に彫りつけられてゐる數限りの無い多くの文字のたつた一つだつて消し去ることは出来ぬのだからね。(椅子にかけらる。)

婆滋羅。(ちつと考へに沈んで)さうですわ、本當に。(半ば獨白のやうに)それだから一日一日生きれば生きる程心の重荷が堪え難くなつて行くばかりですわ。(嘆息する。)

韋提希。(遮るやうに)違ひますよ、婆滋羅。その心の重荷に押し潰されてはならぬと言ふのですよ。その心の重荷が大きくなればなる程それに堪え忍ぶ覺悟を強めて行かねばならぬと言ふのですよ。(再び自分に言ひ聞かすやうな調子になりゆく。)何故と言つてわたし達は假令齒を喰ひしばつてなりとも度ましく自らの過去のすべてを背負ふて眞實の和らぎの世界へ急がねばならないのだから。それがわたし達に許されてある唯

一の道なのだから。さうしてそれが人間に恵まれる最も尊い寶たからものなのだから。(婆滋羅のちつと悲しく立ち盡して考へに沈んでゐるのを見て、やさしく)まあそこへお掛けなさいよ。

婆滋羅。(素直に、しかし黙つたまゝ一の椅子に掛け、涙ぐんだ眼で韋提希を見る。)

韋提希。(沁々と)本當に、生きるといふことは忍ぶといふことですものね。永劫に忍んで悔むぬ精進の心を保つことが出来たならば、何時かはわたし達の日が来るに相違ありません。たとへば因陀羅の神の怒りによつて大きな榕の樹の枝を引き割くやうな恐しい暴風雨あらしの暗い夜のあとに麗かな日光と透き徹つた清い空氣の漂ふ朝がついて来るやうに、わたし達の永い苦みの夜のあとにも明るい温かい朝の光が恵まれねばならぬのぢや。

婆滋羅。お母あさん！あなたは本當にさういふ日の来るのを堅く信じてゐらつしやるやうな澄み切つたお顔をしてお出でなされます。けれどもわたしはさういふ明るい日光がこの王舎城の宮殿に射すやうな日が来やうとは信じられませぬ。お母あ

さま、わたしはわたしだけに色々考へました。けれどもわたしの考へは、わたしの希望は、皆あの遠い西の國々の沙漠を渡る際商等が折々見かけるといふ蜃氣樓のやうに直ぐに消えてしまふのです。おゝ永劫にわたしに沁々とした心の静けさが恵まれやうとは思はれませぬ。わたしは呪はれてゐるのです。(泣く。)

韋提希。呪はれてゐる？ (半ば窘めるやうに半ば勉はるやうに) 婆滋羅。お前は無理から自分の運命を暗くするやうな恐しい言葉を避けねばなりません！

婆滋羅。(さめくと泣く。) でも、お母あさま。わたしは——(間。歎息しつゝ) かうも、かうも恐しい出来事がつきづくにわたしの弱い心の上へのしかゝつて來るのですの。(短き間。突然) お母あさん！ あなたは今度のわたしの兄の死をどうお考へてございますか。あの舍衛城の毘瑠璃王のもの凄しい死に方を——

韋提希。(眼を睜つて婆滋羅を見詰める。)

婆滋羅。毘瑠璃王が眞暗い小夜中頃に警鐘の音に愕いてはね起きた時には、もうさし

もの宏壯な舍衛城の宮殿も一面に火の海になつてゐたさうでございます。兄は一人の婆羅門に助けられて辛じてその恐しい業火ゴウカを脱れて……。

韋提希。(幽かに慄えを帯びた聲にて) 業火？

婆滋羅。さうですお母あさん！ それは業火といふより外に名のつけやうの無い不思議な突然な火であつたさうでございます。兄はその恐しい黒烟の中をやつと脱れて宮殿のうしろを回つてゐる運河の岸から河船を乗り出して避難しやうといはしました。が、すると忽ち船火事が起つて到頭狂ひ死に、焼け死んだのでございます。

韋提希。(或る想念に打たれて眞蒼になる。) おゝ婆滋羅！ (かすれたやうな聲にて) それはまあ、

本當に——

婆滋羅。いえ、お母あさん！ (短き間をおいて) それは、死なれて見ればあゝいふ兄ではございますけれど、やつぱり悲しい氣持がいたします。けれどもお母あさま。わたしは兄があゝいふ恐しい最後を遂げましたのも當然の報ひだとしか思はれませぬ。

えい、さうですとも！ 屹度それは諸天の冥罰を蒙つたのに相違ございません。だつて、あのいつくしみ深い父の波斯匿王（ハシノクニ）を殺害して王位を奪ひ取るやうな悪人ですもの。その上に僅かばかりの恨みを根にもつて大聖世尊の御出生遊ばされた由緒正しき釋迦種族の老幼男女を一人も残らず虐殺するやうな殘逆無道の人間ですもの、生きながら地獄へ落ちるといふのも……。

章提希。（堪りかねたやうに遮つて）あゝ、婆滋羅！ お前は……。あゝ、お前の言葉はわたしに恐しいことを思ひ起させる――

婆滋羅。（反射的に強く遮つて）いえ違ひます違ひますお母あさん！ 阿闍世王様はわたしの兄とは違ひます。王様は毘瑠璃王のやうな悪人ではございません。王様は淋しい方です。不幸な方です。さうです、不幸な方と言つた方が一番本當なのです。けれども、けれども、あゝもしや――（堰き兼ねたやうに熱い涙をはらくと流して）あゝ、それと思ふとわたしは……。わたしは……。卓の上に突伏して烈しく泣く。）

章提希。（聞耳を立て）誰れか上つて来たやうぢや。（泪ぐんだ眼を以て左の階段の方を注視する）

婆滋羅依然として突伏したまゝ鳴咽してゐる。

阿闍世の聲。（左の方より聞ゆ。）よろしい。汝等はあちらへ控へてをれ！（その答へは聞えず）

婆滋羅始めて阿闍世の上り來りしことを知つたやうに顔を上げ泪を拭ふて立ち上る。

阿闍世登場、王冠を戴き禮装をしてゐる。

章提希も立ち上り、婆滋羅と共に阿闍世を迎へる。

阿闍世。（章提希を見て不可抗的に起つて來る不快な感情を抑えて）母上も此處でしたか。婆滋羅、お前は多分この樓閣にゐるだらうと思つてやつて來たのだ。今、諸國の使節との謁見がすんだ所だ。（つかくと歩みよつて安樂椅子の背に手をかけつゝ婆滋羅の顔に注意して）婆滋羅！ お前は泣いてゐたね。また、つまらぬ愚痴をこぼしてゐたのだらう。困つたもんだ。

婆滋羅。（椅子の上にくづ折れてすゝり泣く。）

章提希。（椅子にかけながら、優しく）婆滋羅や。お前本當にもう少し氣を鎮めてくれないと――

阿闍世。(少し苦々しげに) ふむ。(投げるやうに椅子に腰を下ろして、ちつと婆滋羅を見詰める。旁白のやうに) だが、女といふものはいゝもんだな。涙といふ隠れ家があるからね。まさかの時にはその隠れ家へ逃げ込めばいゝのだからね。おまけに其處では丹念に甘い悲しみを味ふことさへも出来るのだからね。

婆滋羅。(顔を揚げて) 王様！ それはあんまりでございます。あなたは餘りにわたくし達の心持に對して御理解が無さ過ぎます。

阿闍世。ほう。それは又――

婆滋羅。(怒むやうに) あなたは此頃わたしの申し上げることを沁々とお聞き下さつたことは唯の一度もございませぬ。

阿闍世。(次第に氣がなごんで来る。) ふむ。また例の提婆達多との縁切り話かな。(婆滋羅の顔を覗き込むやうにして) ふゝ、さうだらう。それなら安心するがいゝ。

婆滋羅。(俄に緊張して阿闍世を凝視する。)

阿闍世。はい、婆滋羅どうしたのだお前の眼は！ わしのうしろに提婆の怨靈でも立つてゐるかな、はつはつは。(間。考へて) だが、提婆達多は何と言つても今の時代には餘り類を見ないやうな人物ではある。たゞ――(ふつと言葉を切る。間。沁々と回想に沈むやうに) あゝ、わゝは始めの中はあの人に逢ふてゐる時は絶えず一種の快い威壓と懐しさを同時に感じさせられたものだがなあ。(間。感慨深く) あゝ、みんなが、一人一人が、淋しい旅を急いで行くのだな。

婆滋羅。(しばらくちつと阿闍世を見詰めてゐる。突然) 王様！ (哀願するやうに) どうぞ本當に提婆達多との御交際をさつぱりとお絶ち下さいまし。お願いでございます。一生のお願いでございます。(眼を据えて) あゝ、恐しい！ 恐しい！ わたしあの方の名を聞いてさへ怖毛カビゲの立つ程恐しくなるのでございます。あゝ此間もあの蓮華色比丘尼が、……

韋提希。(蓮華色と聞くと突如として悲愴な面持になり、思はず) あゝ！ (泣くむ。)

婆滋羅。……あの美しい氣高い蓮華色があの人に打ち殺されたことを聞いた時には、

刃のやうな冷たいものがわたしの襟元から五體を貫いて走りました。あゝもしやあなたの御身の上に——（ふつと言葉を切つて吐息をもらす。）

阿闍世。うむ。あの時には流石のわしもぎよつとした。胸の底から腹立たしいやうな悲痛なものがむくれ上つて来るやうに感じた。わしは蓮華色といふ比丘尼にはそんなに尊敬を拂つてゐる譯ではない。いや、あの女の静かな、それでゐて妙にぢぢりりと人に迫つて来るやうな話振りに惹かれるといふよりも寧ろ反感を催させられることが多かつた。それなのに蓮華色の死はひどくわしを悒鬱にした。蓮華色は氣の毒なことをした。提婆も氣の毒なことをやつたものだ。さういふ氣があゝの時にちらりとわしの胸に射したのだ。血を流すことの痛ましさか不思議にも沁々と感じられた。餘りに多くの人々の血を見て來たせいかも知れない。何しろ十五六の時分から三軍を指揮して戦ひに出掛けたわしだからなあ。その頃はたゞもう血を見るとぞくぞくと嬉しかつたものだがなあ。（感慨に沈む。）

婆滋羅。あゝ王様！

阿闍世。（淋しく微笑んで）こゝらで一つ發心はつしんして釋迦の信者になつたらわしの半生にいゝ切りがつくと言ふもんだがなあ。さうして後世の甘い歴史家といふ人達がわしが單に釋迦の信者になつたといふことの爲にあらゆる美しい文字を駢べてわしを讚美するだらうにな、はつはつは。（少し皮肉な調子にて）いや、それよりも差しあたり民衆の輿望をつなぐにも都合がいゝかも知れないがな。（笑ひながら）うむ、さうだ。わしが釋迦に歸依したといふことが聞えたら國內の人民は箆食たんじき壺漿こじょうしてわしの徳を譽めたゝへる爲に雲の如くわしの宮殿に集つて來るだらうがな。……

婆滋羅。あゝ王様！ あなたはどうしてさういふことをばかり仰在るのでございませう。あゝ、もつともつとあなたの御身に差し迫つてゐる大事なことが……。

阿闍世。（遮るやうに）もつと大事なこと？ はてね。（薄く微笑んで）民心の收攬といふことよりも重大なことは無かつた筈だが。

婆滋羅。(もどかしげに何か言はうとして苦しんでゐたが、突然、突き破つて出るやうに) 魂です！ あなたの魂です！

阿闍世。(俄に固き表情になる。) 魂？ ふむ、魂より外に眞に民衆を率ゐる力は無いといふのだね。(婆滋羅何か言はうとして苛々する。それを抑えて) はい。わしは魂の話には飽いてゐるのだ。あの言葉だけで内容の空虚な魂の御説法には！ (忽然として暗い調子になる) わしの魂はわしにまかしてくれ。わしの魂に觸つてくれるな。落ちつく所へわしの魂を落ちつかせてくれ。

婆滋羅。(懸命に) あなたの魂の落ちつく所は恐しい地獄の炎の中より外にございませぬ！ (卓上に泣き伏す。)

阿闍世。(ギョツとして睨むやうに婆滋羅を見詰める。間。突然淋しく笑ふ。) はい、婆滋羅。お前は一體どうしたのだ。わしはお前の柔かい微笑を覚えて來たのぢや。わしのすつかり疲れた頭を慰められやうと思つて。それなのに—— (ふつと言葉を切つて、兩足を卓の

下へ投げ出して、安樂椅子に深く身を沈める。)

婆滋羅。(依然として卓上に伏して嗚咽してゐる。)

韋提希。(阿闍世に向ひ靜かに勉はるやうに) 本當にお疲れだらうね。

阿闍世。(身體を起して) えい。此頃あまり多忙なせいかも知れませぬ。

一人の侍女、右上手より登場。

侍女。(恭しく一禮して) 申し上げます。御夕餉のお仕度が整ひました由を大膳職より申してまゐりましたでございます。

阿闍世。さうか。(鳥渡考へる。韋提希に向ひ) 母上。この見晴しのいゝ樓閣の上で一緒に夕餉を食べてはどうでせう。(獨語のやうに) それがわしの頭を慰めてくれるかも知れない。

韋提希。(阿闍世に向ひ快く頷いて、婆滋羅に向ひやさしく) それがいゝでせうね、婆滋羅。

婆滋羅。(靜かに頭を上げ、涙のたまつた眼で韋提希を見て) ほんにそれがよろしうございませう。

韋提希。では。(侍女に向ひ)こちらの方へ運ばせるやうに。

侍女。畏りましてございます。(一禮して去らんとする。)

阿闍世。あ、鳥渡待て。

侍女。(停つて)はい。

阿闍世。太子様をこちらへ來られるやうにお呼び申せ。

侍女。畏りましてございます。(再び一禮して退場。)

阿闍世。(韋提希に)優陀耶はこの頃丈夫になりましたか。

韋提希。えい。あの何時も悒鬱な顔をしてゐた子が、秋風が立ち始めると暫くの間に

見違へる程丈夫さうになつてね。(微笑んで)此頃はどうかするとわたしの所へあの那羅延ちみんを連れて來てわたしを困らしたりしますよ。

阿闍世。那羅延? あゝ、何時ぞや着婆が連れて來てくれたといふあの犬ころのことですわ。(苦笑して)婆滋羅。ちと窘めてやるがい。

婆滋羅。小言を申しますと直ぐにお母あさまの所へ逃げて行つてお母あさまに甘えてばかりゐるのでございます。

阿闍世。ふむ。それで優陀耶は此頃さつぱりわしに寄りつかぬやうになつたのだね。

婆滋羅。(阿闍世の顔を見い見い)あなたが何時もこわいお顔をなされては考へ込んでばかりわらつしやいますから恐しがるのでございますわ。

阿闍世。(空虚な笑ひ)はゝゝさうか。兎に角早く來るといゝがなあ。近頃どうかすると引き延ばすやうにあの子の成長を祈りたい氣持がすることがある。

婆滋羅。(沁々として)本當に。

韋提希。(感慨深く)わたしはまたあの兒の健かな血色をして宮殿の回廊や庭園などを飛び歩いてゐるのを見ると、そなたの小さい時分の姿をそつくり見るやうでね。

阿闍世。(突然不快な表情になる。)わしの小さい時分? (旁白。)わしにもあんな時代があつたのだ。

侍女。(登場。一禮して) 仰せの趣きを大膳の大夫に申し傳へましてございます。

阿闍世。太子は？

侍女。(當惑したやうに) 太子様はあの御泉水のほとりにお氣に入りの那羅延と戯れてお出で遊ばされるのでございます。大王様のお召しの旨を申し上げますと、那羅延が淋しがるから行かないと仰せられるのでございます。

阿闍世。(眉をひそめて) 困つたものだ！ うまくすかして連れて来るがいい。

侍女。(益々當惑したやうに) 色々と言葉を盡して申し上げましたのでございますが、はい……仕舞ひには那羅延と一緒になら行くとかう仰在るのでございます。

婆滋羅。(思はず) まあ——

阿闍世。(愈々不興氣に) 何といふ我儘を言ふことだ。(考へて) だが、まあ仕方がない。

那羅延を連れて来いと言へ！

侍女。(殆ど信ぜられぬやうに一瞬間ぼんやりと阿闍世を見てゐる。やがて) は、はい。畏りましてござ

ります。(一禮して退場する。)

給侍一、二、各々膳部をさゝげて登場。膳部には純白の薄絹が覆ふてある。給侍等それ〴〵恭しく卓上に並べて白布を除いて叮嚀に一禮して退場。つゞいて給侍三、四、同じく膳部をさゝげて登場。卓上に按排して恭して一禮して退場。

入れ違ひに優陀耶登場。人々を背にして階段の方をちつと見下してゐる。一匹の小犬侍女に助けられて登り来る。侍女無言のまま人々の方へ一禮して退場。

優陀耶。(小犬の上りしを見て、やうやく安心せる面持にて人々の方を向いて) お父、うさん！ (見回して) やー！ お母あさんも、お婆あさまも……。(馳せよる。)

阿闍世。優陀耶—— (抱き上げる。)

優陀耶。(愉快氣に) お父うさん！ 坊は到頭那羅延を連れて来ちやつた。那羅延があすこの(右上手を指しつゝ)段を登るのをこわがるのを無理に連れて来ましたの。(小犬は落ちつかぬ様子にてあちこち歩く。呼ぶ。) 那羅延！ こゝへ来い！

婆滋羅。(穿めるやうに) まあ、この子は！

阿闍世。(すつかり機嫌を直して、優陀耶の顔を覗き込むやうにして) 優陀耶、お前は太閤丈夫さうになつたなう。

優陀耶。お父うさん！ 坊は那羅延を家來にしてやつたの。(再び呼ぶ) 那羅延！

阿闍世。(苦笑して) さあ御飯を食へませう、優陀耶。お父うさん等はお前の來るのを待つてゐたのぢや。(立ち上り、自分と韋提希との間の椅子にかけさせてやる。)

給侍五、二三種の酒壺を銀盆にのせて、さよげて登場。忝しく四人の前の高杯に注ぎ、一禮して退場。

婆滋羅。頂戴いたしませう。

皆々食事を始める。

韋提希。(霎時して、沁々とした調子で、誰れに言ふとなく) この樓閣の上で御飯を頂いたりするのは久しぶりぢや。

婆滋羅。(韋提希の方を見て、沁々と同感するやうに) 本當でございますわ、お母あさま。

韋提希。(何事かを回想するやうに、しめやかな調子で) 婆滋羅、わたしはかうして一緒にうち

くつろいで食事をしますとね、色々の古いことなどが想ひ出されて……。

阿闍世。(幽かに眉を擧げる。話頭を轉ぜんとして) まつたく、うちくつろいで食事をする暇もありませんよ。此頃のやうにかう毎日忙しい思ひをさせられては。——大臣達から色々の政務の裁可を願ふて來る。地方の官廳からは様々の上奏が續いて來る。おまけに外國の使節が相ついでやつて來る。すつかり參つてしまふ。(碼頭の高杯を唇にあてつゝ) 戦争や遊獵に出てはいくら無理をしても滅多に疲れを覺えたためしの無いわしも、外國の使臣などに謁見させられると不思議に疲れてしまふのですよ。……尤も此頃少し身體のよくない加減もあるかも知れないけれど……。 (婆滋羅暗い眼をして、ぢつと阿闍世を見る。) それに母上。今日などは朝から三度も會はされたのですからね。殊に番賞彌ヒョウシヤミから來た使節の惡叮嚀な長口上にはまつたく閉口してしまひました。實際國際間の禮節など、言ふものは……。

優陀耶。(人々の會話に無關心に食事をしてゐたが、突然叫ぶ) 那羅延！ こつちへ來い。お前に

も御馳走をやる。

優陀耶、肉の一片を牀に投げる。小犬走り来つて食ふ。阿闍世思はず不快氣に眉を擡める。

優陀耶。(阿闍世を見て) お父うさんも那羅延にやつて下さい。(婆滋羅日顔で優陀耶を制する。

少しも感ぜぬらしく、迫るやうな調子で) さあ、お父うさん! やつて下さい、ね、ね。

阿闍世。(不承無精に肉を投げる。) 那羅延。貴様は仕合せな奴だな。

優陀那。(悦に入つて) あ、那羅延があんなにうまさうに食べてゐる。(悠然とした調子で) ち

あ、お婆あさまもやつて下さい。

韋提希。(微笑しつゝ肉を投げる。)

優陀耶。(命令するやうに) お母あさんも!

婆滋羅。(仕方なしに笑つて) 小さい暴君! お前にはかなはない。(肉を投げる。)

優陀耶。(勝ち誇つて) ようし、坊がもう一片やらう。(肉を投げて) 那羅延! そら、ち

しいだらう。

婆滋羅。(あきれたやうに) まあ、本當にこの子は!

阿闍世。(淋しく笑つて) ふむ。この調子では仕舞ひにはわれくは那羅延の御陪食を仰

せつかるやうになるかも知れないな。(深き溜息を洩して) あゝ子供といふものは不可

思議な魅力を持つてゐるものだなあ。「子は三界の首枷」とは本當によく言つた言

葉だな。(沁々と優陀耶の横顔を眺めて、再び嘆息する。)

韋提希。(突然或る回想に打たれて涙ぐむ。沁々として) あゝ、阿闍世! そなたの泌々とした

言葉を聞くと、わたしはそなたの幼い時分のことを思ひ出さずにはをられません。

阿闍世。(優陀耶の横顔を眺めつゝ、不可抗的に起つて来る不快をちつと制して、仕方なしに聞いてゐる。)

韋提希。(ちつと眼を据えて、考へるやうにして) あゝさうぢや。あれは丁度そなたがこの優

陀耶のやうな年頃でした。そなたの手の小指がひどく痛んで一と月ばかり激しく苦

んだことがある。(言ひ終つてはつとして阿闍世を見る。)

阿闍世。(突然飛び上がる) 母上ッ! あ、あなたは—— (忿怒と昂奮の爲に唇を震はしつゝ) あ